
KEEP OUT 3 君に伝えたいこと

北川ライム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

KEEP OUT3 君に伝えたいこと

【Nコード】

N9726R

【作者名】

北川ライム

【あらすじ】

ほつみ・たかや

穂積隆也は、“親友”である春樹のことがどうにも気になって仕方がなかった。

探偵事務所なんかに入社してしまったことも、上司の美沙という女も気に入らない。

けれど春樹はなかなか心の内を見せてくれず、その心配は空回りするばかりだった。

一方、家出少女の行方を追う春樹の行き過ぎた行動が、春樹自身を

危険な方向に導いてゆく。

他人の肌に触れると、その記憶や映像、感情の一部を瞬時に読みとってしまうという、春樹の厄介な能力。

今まで気付かなかった、その能力の本当の恐ろしさが、春樹を闇の淵に追い込んでしまう。

美沙は春樹を救ってやれるのか。それとも更に傷つけてしまうのか。

新たな二人の脇役（穂積隆也、立花薫）を投じて送る、「KEEP OUT」シリーズ、第3弾です。

第1話 親友

穂積隆也は春樹の部屋のインターホンを押そうと伸ばした指を一旦止め、もう一度時計を確認した。

8時10分。

大丈夫、春樹はまだ出勤前。忙しい時間だとは思うが、彼なら嫌な顔せずにドアを開けてくれるはずだ。

隆也は手に持ったDVDの束に目をやり、何となく安心した後、再び指を伸ばした。

ほづみ・たかや
穂積隆也、18歳。

春樹とは高校の時の同級生だ。高校1年生の「ある日」から、春樹は隆也にとって「親友」だった。

恥ずかしげもなく隆也は春樹にそう言ったことがあるが、確か春樹には、ただ笑って流されたような記憶がある。

特に誰かと連むわけでもなく、淡々としている春樹には隆也の「親友宣言」は重かったのかもしれないと割り切った。

現在隆也は大学浪人1年生。予備校通いの毎日だ。

身長は彼の理想に届かず172センチで止まった。

小動物のような円らな目元に小作りな鼻。短かめの髪。

そんな少々童顔なルックスのせいで、大人しい勉強少年に見られがちだったが、実は曲がったことの許せない熱血漢タイプだった。そしてその分、情に厚い。

そんな隆也が高1のある日、あるCDショップで万引きと間違われた。

ここ数年その店は中高生の万引きが後を絶たず、店長はピリピリしていた。

なぜ自分が間違われてしまったのか隆也には未だに分からないのだが、店を出たところを店長に呼び戻され、カバンを調べられた。

数日前別の店で買った新譜のCDを持っていたが、もちろん開封済みであり、盗品である証拠は何もなかった。

けれど店長は尚も厳しく追及し、隆也の名前と学校名を聞いてきた。引っ込みがつかなかったのかもしれない。

もちろんそこで大人しく冤罪を被る隆也ではない。

逆に名誉毀損だと騒ぎたて、半ばひるんだ店長を睨み、店を飛び出した。

怒りと恥ずかしさが隆也を満たし、火のついたように赤い顔をして歩いているときにバツタリ出くわしたのが春樹だった。

頭に血がのぼっていた隆也は、狭い歩道の行く手に立っていた春樹を「どけよ」と乱暴に払いのけた。

なぜあんな乱暴な態度を取ったのかと悔やんでいるのだが、もしかしたらあの時、自分と対局な平和で安穏な空間に居る春樹の穏やかな表情にむかついたのかもしれない。

春樹は不意に隆也の手をつかみ、「ねえ、時間ある？」と訊いてきた。

「なんだよ」

かなりきつい調子で隆也は言った。

「そのマック行かない？」

向かいのファーストフード店を指して春樹は言った。

学校では特に親しくしていたわけではない春樹にそう言われて隆也は驚いた。

「なんで？」

「家の鍵、無くしちゃってさ。家族が帰ってくるまで時間潰さなきゃなんないんだ」

「だから何だよ。勝手につぶせよ」

「頼むよ。一人で入るの嫌なんだ」
そう言って春樹はニコリと笑った。

渋々といった態度で隆也は春樹に付き合うことを承諾した。

何らかの気分転換が必要なのが、少し冷静になった隆也の頭の隅にあったのかも知れない。

そのまま家に帰っていたら、きっと自室で悶々として、のたうち回っていただろう。

春樹といると、不思議と気持ちが落ち着いていた。

まるでその時、隆也が何に傷ついているのか、何を忘れようとしているのかを知っているように、春樹は他愛もない会話で隆也を落ち着かせてくれた。

普段、そんなにお喋りでは無いはずの級友が。

春樹を見ながら何度もついさっきあった出来事を語ろうと思ったが、その和やかな空間はもう、そんな愚痴を言って曇らせるべきでは無いような気がしていた。

その必要も感じなくなっていた。

隆也がその日受けた傷は、その級友のお陰で化膿せずに済んだのだ。もしかしたら春樹は自分にとって特別な人間なのではないだろうか。そう思わずにいられなかった。

そしてそれは2日後、確信に変わった。

春樹が朝、まだ寝ぼけたようなボンヤリした声で隆也に伝えてきた。

「ほら、一昨日行ったマックスの近くにCDショップあるだろ？ あそこに昨日寄ったらさ、店長さんが僕の制服見てこう言うんだ。『君と同じ学校の男の子を昨日万引きと間違えてしまった。もしその子を見つけたら、本当に申しわけ無かったと伝えてほしい』って。そんな話、聞いたことある？」と。

隆也は、まだ心の隅でくすぶっていた苦い塊がスッと蒸発した感覚を覚えた。

ミントのような清涼感を残して。

目の奥がジンと熱くなり、思わずその友人に抱きつきそうになるのをぐっと堪えるのに苦労した。

自分の中にあった厄介なプライドは、傷つけられる事無く自分の中に残った。

たぶんあのままだと一生忘れることのない傷になるはずだった。

誤解が解けたことは春樹のせいではないし、すべて偶然だったのかもしれないが、隆也はそれ以来春樹をととても大切な友人だと思うようになった。

そう思わずにいられない何か春樹にはあった。

2年前の秋、春樹の家族が春樹を残して全員亡くなってしまう、あの悲惨な火災が起きたあと、それは隆也の中で更に強く、大きくなっていった。

隆也がドアホンを押すと、ほどなく春樹はカチャリとドアを開け、眠そうに目を擦った。

「あれ？ どうしたの隆也。こんな時間に」

声は眠そうだが、春樹はちゃんと出勤の身支度を整えていた。

堅苦しいスーツでは無かったが、すらりとした体躯にスラックスとボタンドアウンのシャツ姿の春樹は、とても大人びた感じがした。

「寝込みを襲いに来たのに」

「遅かったみたいだね。もう出かけるところ」

「もう？ ……早いな。辞めちゃえよ、そんな職場」

そのメチャクチャな提案に春樹は声を出して笑ったが、それはけっこう隆也の本心だった。

第2話 苦手な女

「相変わらず、僕の仕事が気に入らないみたいだね」

女子達がいとも羨ましがっていた、サラリとした質のいい髪を左手でかき上げながら春樹は笑った。

「100回でも言うよ。春樹は頭良いんだから大学に行くべきだ。なんだってこんなヤクザな仕事なんか」

「今、世の探偵業従事者を敵に回したよ？ 隆也」

「いいよ。俺は一生世話になること無いから」

「ねえ隆也。朝からそんな話ししに來たの？」

春樹はさすがに少し困った顔をして隆也を見た。

この、何を言っても許してくれる友人と一緒に過ごしてきたお陰で、隆也はさらにズケズケ物を言う性格になってしまった。唯一の弊害だ。

けれど本当の核心部分は隠してある。それを言ったらさすがに春樹に嫌われるかも知れない。

本音を言うと、隆也は春樹の上司である女が苦手だった。

春樹の部屋の2軒隣という、信じられない近さに住んでいる戸倉美沙が。

美人だとは思うがガサツでだらしない。

一度開けっぱなしの部屋をチラリと見てしまった事があるが、男の自分だってあんなに散らかすことは出来ないというほど散らかっていた。

春樹の部屋から帰るとき、泥酔して千鳥足の美沙にバツタリ出くわしたこともあった。

つまり酒癖も悪いのだ。

そういう女はきつとどこか破綻してるし、男にもだらしないと隆也

は思っていた。

家族ぐるみの付き合いだったこともあり、春樹は彼女を信頼しているようだが、大学を諦めて就職した先の上司としてふさわしいとは隆也には思えなかった。

それも経営も収入も不安定な小さな探偵事務所とくれば、尚更だ。

「なあ春樹。朝って、あの人と一緒に出勤するの？」

別にどうだっていい質問だと思いながら隆也が訊いたその時、注目していたそのドアがガチャリと開いた。

スラリとした体をパンツスーツに包んだ美沙が現れると、悔しいことに、さすがの隆也も“綺麗な人だな”と認めざるを得なかった。

「あれー、隆也。こんな朝早くどうした？」

「何でいつも呼び捨てですか」

「長い付き合いなのに硬いよねー、隆也は。こんな早く家を飛び出すってことは、またお母さんと喧嘩でもした？」

「そんなじゃないですよ！」

図星を突かれて赤くなった隆也に近づき、美沙はその頬をぷにと摘んだ。

「ちゃんと勉強して大学合格して、両親安心させてあげなさいよ」そしてそのまま顔を近づけ、

「勉強に疲れたら、またいつでも事務所に遊びにきなさいよ。コーヒークらい煎れてあげるから」

そう言って艶やかなピンクの唇でニツと微笑むと、さっさと突き当たりのエレベーターに向かった。

ドアが閉まるほんの一瞬、初めて春樹を見て「じゃ、先に行くから」と手をあげて見せた。

「はい」

一連の言動にまだ顔を赤らめている隆也の横で、春樹が小さくそう答えた。

「な・・・なんだよあの人は！ 会うたび人を子供扱いして。俺は小学生じゃないぞ！」

美沙につままれた左頬をドギマギしてさする隆也に春樹は言った。

「お姉さんみたいだろ？」

「お姉さん？ あれは一步間違うと痴女だ。すぐ触るし。ぜったいあれは男たらしだよ。間違いない。男いっぱいだまくらかしてる口だよ」

「酷い言われようだな」

春樹が可笑しそうに笑う。

「春樹も大変だろ。事務所でべたべたされてんじゃないか？ 気をつけるよ？」

一瞬、間があった。

すぐに笑って返して来るだろうと思っていた隆也が不思議そうに振り返ると、エレベーターの閉じたドアをボンヤリ見ていた春樹がこちらを向いた。

「僕にはそんなこと、しないんだ」

そう言って、ほんの少し笑った。

そう言えば美沙は春樹の死んだ兄の恋人だった事を改めて思い出した。

不謹慎だっただろうか。春樹のあの一瞬の間は、そのせいだろうか。隆也が反省して口を噤んだため、不自然な沈黙ができた。

春樹はさりげなく腕時計を見たあと、「僕も準備して行かなきゃ。悪いな隆也。また晩飯でも一緒に食べよう」と言って笑った。

「おう」と隆也が頷くと、春樹はゆっくりとドアを閉めた。

春樹が一瞬見せた表情が、隆也を動転させたのかもしれない。

自分がまだしっかり握っている水色の紙袋の存在を、すっかり忘れていた。

春樹が観たいと言っていた映画のDVDが何本か入っている。

朝っぱらから母親と軽い口げんかをしてムシヤクシヤし、春樹にDVDを渡す名目で家を出てきたのだ。

「まあ、またでいいか」

そうつぶやくと隆也はエレベーターへ向かった。

今まで何となく気付いていたことが、今のことも含め、隆也の中でそれは確信に近づいた気がした。

“春樹は美沙の事が好きなんじゃないか。”
そしてもう一つ。

“美沙は春樹を重荷に感じてるんじゃないか。”

後者のほうが本当だとしたら、自分は本気で美沙を嫌いになるに違いない。

そんなことを思いながら紙袋のヒモをグッと握り、隆也はエレベーターのボタンを押した。

第3話 行方調査

「家出少女を捜すの？」

春樹はいつものように美沙のデスクに自分の回転スツールを近づけ、美沙の取りだした調査依頼書を読んだ。

「谷川理紗、16歳、高校1年生。家出常習犯らしいわよ」

美沙が言った。

これは本社、つまり立花聡へたちばな・さとし）局長の元に来た案件だが、行方調査専門にやっているこの鴻上支店に回されてきた。時間と手間を取られる割りに成功率が低いやっかいな行方調査は、専門にやっている美沙に任せた方が効率が良い。公式ではないが、美沙と立花局長の間で、そういう取り決めが行われていた。

すでに昨夜、美沙は依頼人である母親同席の元、立花局長と打ち合わせをしてきていた。

未成年の家出人調査は一番厄介だ。

子供に無関心な親からの情報はとても少ない。

子供部屋から無くなっている物、その日の服装。失踪の原因はおろか、交友関係者のリストアップもまともに出来ないケースが多い。今回の谷川理紗に関してもそうだった。

辛うじて分かった少ない友人や知人のリスト、そして予想される立ち寄り先のリストだけが頼りだ。

「警察に搜索願いは出してらんでしょ？」と、春樹。

「もちろん。1ヶ月も前にね。今までも家出の度に搜索願いを出してるのよ、この母親。中1の頃から谷川理紗の家出実績は数知れず。そのほとんどが、ぶらっと1、2週間で自分から帰ってくるパターンでね。警察も届けを出す度に失笑よ」

美沙も少し苦笑を混ぜながら言った。

春樹はじつと少女の資料写真を見つめた。

自分と2つしか違わないその少女は、幼い顔立ちの上に濃いメイクを施し、冷めたような眼差しは見ているこちらを落ち着かない気分にする。

「今度もまたぶらりと帰って来るんじゃないかな」

希望を込めて、春樹は言った。

「そうなれば良いんだけどね。だけど今回はもう2カ月になるらしいのよ。だから本気で心配になって母親がうちに依頼に来たって訳。警察が家出娘を本腰入れて捜してくれる機関じゃないって、今頃気付いたのね」

美沙は腕組みをして、回転イスの背もたれに身を預けた。

「2カ月かあ。それはお父さんもお母さんも心配だね」

春樹は写真に言い聞かせるようにそうつぶやくと、しばらく黙って依頼書を読んだ。

堅実な父、母、兄を持つ、普通の家庭のお嬢さんに見える。

「幸せそうな家庭なのに、どうして家出なんかするのかな」

春樹は再びボソリと言ってみた。

しばらく美沙が奇妙な沈黙を作ったので不思議に思い、目線を上げると、じつとこちらを見ていた美沙と視線が合った。

「・・・外からじゃ分らないんじゃない？ 問題のない家庭かどうかは」

美沙は表情を変えずに春樹にそう言うと、ジャケットのポケットからタバコを取り出した。

「タバコ、辞めるんじゃないの？」

「やめるの、やめた」

「意志薄弱」春樹が笑うと、

「うるさい、クソガキ」と、すぐさま帰ってきた。

美沙はくわえたタバコに火をつけるとすぐに立ち上がり、2カ所ある窓を全開にした。

秋のヒンヤリした空気が流れ込んで来る。

大通りに面した3階に位置しているために、普段は喧噪と埃を気にして開けない窓だ。

ガサツなように見えて、美沙は春樹に対して、さりげない心配りを忘れなかった。

そういう部分に春樹はいつもドキリとする。

自分が頼ってしまった為に、きつと迷惑をかけているだろうこの女性に。

今はもういない自分の兄の恋人。そして、今は姉のように春樹を安心させてくれる存在だ。

時々湧き上がる美沙に対する奇妙な感情に、春樹はいつも戸惑った。振り払わなければならないと分かっていた。

そうでなければもう、この人の側にはいられない。

自分は、人に触れてはいけない化け物。

“そう言う感情”を持つことは随分前に諦めていた。

ただ、今は側にいたい。他に望まない。重荷になっていると知りつつも。

甘ったれで、行き場を見いだせなかった自分をここに置いてくれる美沙に報いる方法があるとすれば、仕事で役に立つことだけなのだ。

その後の打ち合わせで、美沙はリストアップされた交友関係者を当たり、春樹は谷川理紗の行きつけの場所での聞き込み調査、及び、各店経営者への通報協力依頼に当たることにした。

「失踪から時間が経ちすぎてから、聞き込みもかなり望み薄かもしれないわね」

美沙が言うと、

「そういう状況のほうが、やりがいあるよ」と春樹は返した。

「それは結構。私も後から応援にまわるから」

「大丈夫だよ、僕一人で。若い子が集まる場所は僕だけの方が警戒されなくていいでしょ？」

「変な真似しないでよ？」

そう言った後で美沙がハッと失言を恥じる表情をしたが、春樹は気が付かないふりをした。

美沙に“そのこと”で気を遣われるのが一番辛かった。いつものように笑って、出来るだけ冗談っぽく答える。

「大丈夫だよ。誰にも触ったりしないから。痴漢容疑で捕まりたくないもん」

春樹の言葉に、美沙が笑った。

いや、笑ってくれた。

・・・冗談は成功しているのだろうか。

『僕は美沙に何を言われたって、平気なんだよ』という、メッセージ。

そしていつもと同じ。

ひたひたと春樹を満たすのは、今のまま、彼女の側にいられる平穏な日々が、一体いつまで続けられるのだろうかという、耐えがたい不安だった。

第4話 忌まわしい記憶

『幸せそうな家庭なのに、どうして家出なんかするのかな』
純粋で真っ直ぐな少年の言葉は、美沙を息苦しくさせた。

何も知らないが故の、穏やかな、優しい言葉だ。

もしも美沙に触れ、その記憶を読みとってしまったとしたら、そんなセリフはきつと言えなくなる。

美沙はやめたはずのタバコの煙を肺いっぱい吸い込んだ。

ほんの少しでもいい。思考を麻痺させてくれと祈るような思いで。

春樹の家族構成は、谷川理紗と同じだった。

真面目な両親、国立大の大学院に通う優秀な兄。そして甘えん坊の末っ子、春樹の4人暮らし。

その幸せな一家を、2年前悲劇が襲った。

春樹が外出している時に家から出火。

近隣にはほとんど被害がなかったものの、火の勢いは凄まじく、3人もろとも家屋は全焼した。

3つの遺体は性別も分からないほど損傷がはげしかった。

兄の天野圭一は美沙と高校の同級だった。

映画や読む本や哲学的思想までことごとく趣味があった圭一と美沙は、決して恋仲にはならなかったが、いい友だちだった。

あの事故は悲惨この上ないものだったが、結局キッチンからの火の不始末による出火として処理され、ローカルニュースに1、2度のぼっただけで、人々の記憶から消えた。

春樹という哀れな遺族を残しただけで。

“本当にそれだけだったら、まだしも救われたのだ。”

美沙は、仕事にとりかかる準備を始めた目の前の少年を見ながら思った。

健気に必死で自分の道を模索しながら前を見つめている春樹。

やっと立ち直りかけているその春樹を、闇に突き落としてしまう事実を自分は知っているのだ。

「どうかした？ 美沙。すごく怖い顔してるけど」

春樹は不思議そうに美沙を見た。

「私はずっとこんな顔なのよ」

「ああそうだった」

春樹の軽口に笑いながらも、美沙の心はまた疼いた。

春樹の声は、この頃圭一の声によく似てきた。忘れたくて堪らないあの声に。

2年前、あの火災が起こる前に圭一が掛けてきた電話の声が、未だに耳から離れない。

『美沙、助けて。美沙、どうしよう。・・・父さんと母さんを殺してしまった。美沙・・・オレ・・・』

いったい何が起きているのか美沙にはまるで理解出来なかった。とにかく携帯を必死で掴み、説明を迫った。

大学に通うために一人暮らしをしていた圭一はその日、半年ぶりに実家に帰ってきていた。

決して裕福な家庭では無かったため、圭一はその生活資金を自分で稼いでいたらしい。

以前会ったときに圭一が、学生でありながら仲間と起業していることを美沙は聞いていた。

ネット上の操作で情報を売買するシステムらしく、違法では無いと言っていたが、あまり興味も無かった美沙は、深くは詮索しなかつ

た。

けれど、違法でないどころか、それは紛れもなく児童ポルノの類のビジネスだった。

圭一の性癖まで知っていた訳ではないが、美沙はにわかには信じられなかった。

その帰省中に両親にその事を知られる事態となり、両親にかなり辛辣になじられたという。

その真面目な両親の激高、今まで培ってきた絆をうち砕く罵詈雑言に、圭一は理性を失った。

気がついたら自分は包丁を握り、父も母も息絶えていた、と圭一は震えながら一部始終を電話口で語ったのだ。

彼にとって、美沙へ報告することは今思えば懺悔だったのかもしれない。

いや、すべてをさらけ出すことで美沙を自分の境遇に引き込み、同胞にして孤独を紛らわそうとしたのか。

その言動に理解はできなかったが、美沙に全てを話しながら、奇妙なことに圭一は落ち着きを取り戻して行ったように思えた。

その不気味な落ち着きこそが、異常な精神状態の現れだと言えたのかもしれない。

電話の向こうの圭一の手は、両親の血で濡れ、その横にはその遺体が無惨に転がっているだろうに。

代わりに美沙は体の震えと吐き気が止まらず、汗ばんだ手で携帯を必死でにぎり、とにかく救急車を呼ぶように繰り返した。

圭一はのんびりした声で「うん、わかった」と言った。

そして「ありがとうね、美沙。さようなら」と。

それだけ言って圭一は電話を切った。

美沙はこの後30分くらいの記憶が曖昧だった。

何度も何度も圭一の携帯に電話を掛け、繋がらずに切る。これを繰

り返していた事だけボンヤリ思い出す。

圭一の家に行こう。

ガクガクする足で立ち上がったのは圭一と会話を終えて一時間以上が経った頃だった。

圭一の家までは電車で40分足らずで行ける距離だったが、そこへ行ってみようと思うまでに、それほど時間を要してしまった。

美沙もまた、普通の精神状態ではなかったのだ。

そこに一本の電話が入った。

高校の時の友人からだった。

圭一の家から火が出たと。

全焼は免れない程の、酷い火災なのだ。

第5話 封印

警察の調べが実際どこまで進んでいたのかは美沙には分からなかったが、結局その後真実が発覚することも無く、仲の良かった家族に不穏なうわさが立つこともなかった。

ただそれは、やり切れない不運な事故として近しい人々の記憶に残った。

春樹という、哀れな遺族ひとりと共に。

「美沙、灰が落ちるって」

ぼんやりしてタバコを持っていた美沙の手元に灰皿を寄せて春樹が言った。

美沙は辛うじて灰を机の上に落とすことを免れた。

「やっぱりおかしいよ。気分でも悪いの？ コーヒーでも煎れようか？」

まるでコーヒーが万能薬だと信じているような口振りで訊いてくる顔が愛おしかった。

「うん、いいね。煎れてくれる？」

美沙がそう言うと、少年は笑って頷いた。

2年前の火災の後の春樹を思い出すのが、美沙には一番辛かった。

大好きだった両親と兄を一度に無くしたのだ。

美沙には想像すら出来ないほどの悲しみだったはずだ。

けれども春樹は美沙の知るかぎり一度も取り乱したり、人前で涙を見せることは無かった。

遠縁の親族によって告別式はひっそり行われた。

死に顔を見ることも叶わず、完全に小窓を閉じられた3つの棺の前に立った春樹は、消え入りそうに小さく、幼く見えた。

どれだけその時美沙は春樹を抱きしめてやりたいと思ったことか。胸が張り裂けそうだった。

けれど、もし肌が触れてしまったら春樹は一瞬にして美沙の記憶を読みとってしまうだろう。

両親を愛し、兄を尊敬することを唯一の心の支えにしている少年を更に傷つけることなど出来るはずがない。

もう、これ以上春樹を苦しめる事は起きてはならない。何一つ。

春樹を見守りながら距離を取ればいい。笑えるほどそれは文字通りの「距離」だ。

春樹がそれを不審に思うことはないだろう。

美沙が自分に触れないのは当然と思っているのだから。

真実は美沙の中に封印された。

「はい、どうぞ」

香ばしいコーヒーの香りが美沙を包み込んだ。

同じカートリッジなのに、春樹が煎れるとなぜか絶妙に香りがいい。

「サンキュー」

「気分良くなった？」

「最初から別に何ともないよ」

「そう？ それなら良かった」

色素の薄い、優しい色の瞳が美沙を見つめる。

その瞳に映っているのは何だろうと美沙は考えた。

死んだ兄の恋人。

忌まわしい能力の秘密を打ち明けた後、前よりも余所余所しくなった姉代わりの女。

いつまでも一人前扱いをしてくれない、冷たい職場の上司。

手を伸ばして、そのまだ幼さの残る頬に触れてみたいと思った。

そう思うたび、どうしようもない腹立たしさが込み上げてくる。

あの忌まわしい事件を起こした兄に。

そしてこの弟に与えられてしまった、呪われた力に。

第6話 始動

「じゃあ、調査に行ってきます」

春樹はラフな服装に着替えると、ジーンズのポケットに谷川理紗の写真、そして携帯と財布だけ突っ込んで立ち上がった。

春樹の中では今回、『家出した友人の妹を捜す少年』という役が設定されているらしい。

こういう仕事上のウソを、春樹はけっこう楽しんでるように見える。

「気をつけるのよ」

「心配ないって。僕は相手に警戒されないタイプだと思うよ。前回だって聞き込みで良い情報取ってきたでしょ？ 今回も絶対何か仕入れて来るから」

「その鼻につくほどの自信がうらやましいわ」

美沙が不満そうに返すと、春樹は笑いながら事務所を出ていった。心配することはない。

今回の調査も危険なものではないし、春樹は絶対にあの力を無闇に使うことは無い。

美沙の心配は今回も杞憂に終わるだろう。今までも、ずっとそのくり返しだった。

けれど春樹といると、常に心配事や不安が澱のように蓄積されていく。

春樹の存在自体が美沙の不安要素なのかも知れない。

春樹を遠ざけてしまえば、その不安からも遠ざかるのだろうか。手の届かない所へ追いやれば、全てから開放されるのだろうか。

けれどもいつも美沙はここで思考を停止させる。

怖くてそれ以上考えることが出来なかった。

まだいいじゃないか。

まだもう少し、今のままで。

美沙は自分の弱さから無理やり目を背け、谷川理紗のファイルをパタリと閉じた。



「すみません、人を捜してるんだけど、この女の子知りませんか？」

あらかじめ、店舗の従業員やオーナーに家出少女についての情報収集と、今後見つけた場合の通知協力を頼んだあと、春樹はたむろしている若者達を中心に声をかけてまわった。

谷川理紗がよく出入りしていたというゲームセンター、ネットカフェ、漫画喫茶やカラオケボックス、ダーツバー。

平日の昼間だというのに、学校を休んで来ているのか、声をかける中高生には事欠かなかった。

春樹が理紗の写真を出して申し訳なさそうに協力を求めると、大概の若者は男女問わず写真を覗き込んでくれた。

「え？ なに？ いなくなったの？ この子。家出？」

髪を染め、カラコンと付け睫毛、アイラインで、原型の分からなくなった目をパチパチさせて、女の子達が写真を見入っている。

ただの好奇心半分、そして自分も何かの役に立ちたいという善意の気持ち半分。

この調査はそれらに期待を掛けるしかない。

春樹の聞き込みに対する同年代の子達の反応も様々で興味深かった。

「なんで探してるの？ カノジョ？」

「この子何か悪いことしたの？」

と、春樹や写真の少女について訊いてくる子。

「家出少女なんて見つからないって。見つけたってまた出て行っちゃうって」

と、搜索の無意味さを指摘して来る子。

あるいは「早く見つかるといいですね」と、氣遣いを見せてくれる子。

表情を見ているだけで、その子達の気持ちにストレートに伝わってくる。

人間には、『触れて心を読む力』など、必要ないのだ。

春樹はこの仕事が好きだった。

最初は確かに進学も何も考えることが出来なくて、美沙に甘える形でここに置いてもらっていた。

けれど今は、なんの目標もなく大学に通うよりも確実に充実している実感がある。

社会の役に立ちたいとか言う、そんな大げさなものではなく、ただ自分が何のために此処にいて、何のために動いているのか、ちゃんと理解できていることに安心できた。

谷川理紗の情報収集を初めて4時間が経った。

そこら辺では一番大きなゲームセンターの入り口付近に設置されたフードコーナーで、メイクを直していた3人の女の子に声をかけた。化粧も服装も大人っぽく装ってはいたが、顔つきはまだ幼く見える。春樹の差し出した写真を見た3人のうち、背が高く、クルクルと人形のように髪を巻いた女の子が声をあげた。

「あれ、この子、見たことある」

第7話 有力情報

「メイクは派手だけど、ちょっと暗い感じのする子でしょ？ ほらあ、ミツヒロといっしょに居た子じゃない？」

巻き毛の子は両隣の女の子達に確認を取ったが、その二人は覚えていないようで、首を傾げている。

「本当に？ そのミツヒロって人、君の知り合い？ 連絡とか取れる？」

春樹が勢いよく訊いてきたので巻き毛の子は少し困ったように表情を曇らせた。

「でも自信無いなあ。勘違いかもしれないし。それにミツヒロとはたまたまカフェで盛り上がって1、2回大勢でカラオケ行っただけで、良く知らないのよ。10日くらい前にチラッとその子によく似た子と歩いてるの見てさ。その子中学生くらいに見えたもんだから、ヤバくね？ って思ってさ、なんか覚えてたんだ。特にミツヒロはタイプじゃないし、ホントはどうだって良かったんだ」

「ねえ、そのミツヒロって人の友達も知らない？」

春樹は相手がひかないように、なるべく穏やかに話をした。

3人はしばらく考え込んでいたが、何の情報も持っていないらしく、残念そうに首を横に振った。

春樹は落胆を隠し、もし何か思い出したら連絡をして欲しいと自分の携帯番号を渡し、礼を言って少女たちと別れた。

他人のそら似かもしれないが、今のところ唯一の手がかりだ。

まだ霞をつかむような感じだが、それまでの疲れと緊張がフッと軽くなる気がした。

「あれ？ 春樹？」

不意に背後から声をかけられ振り向くと、ファーストフード店の特大コーラとハンバーガーを手に持った隆也が、店の入り口に立っていた。

「何やってんの？ こんな所で」

隆也が再び不思議そうな声を出した。

「隆也こそ何やってんの？ 予備校じゃなかった？」

「今日はな、パスしたんだ」

平然と言う隆也。

「それってサボったって事？」

「人聞きの悪い。あくまでペース管理だ」

「おばさんが知ったら何て言うかな」

サラリと言う春樹に隆也は慌てて走り寄り、コーラを持ったまま春樹の首に腕を巻き付けた。

「言ったら殺す」

「その前に、隆也がおばさんにボコボコにされるな」

春樹は笑いながら返したが、7分くらいまでシャツを腕まくりした隆也の肌が一瞬首に触れてきたので、ドキリとしてさり気なく体を離した。

けれどその一瞬ですでに、親友が今朝、母親と進学についての酷い口喧嘩をし、かなりムシヤクシヤしていることを感じ取ってしまった。

すぐにじゃれてくる隆也の傍にいますと、こういう事故はたまに起こる。避けられない、不可抗力の事故。

「春樹は何？ サボってゲーム？」

隆也の声にハッとして、春樹は我に帰った。

「まさか。仕事中だよ」

「なにになに？ 何かの調査？」

興味深げに目を輝かせ、隆也は訊いてくる。

「なんだよ。やくざな仕事だとか言ったくせに」

笑って返しながらも春樹は、自分の心の隅にいつもの黒い不安が漂っているのを感じていた。

・・・心を覗かれているのだと、この親友が知ったなら、どんな反応をするのだろう。

隆也はいつでも一点の曇り無く、春樹を大切な友人として想っている。

時たま触れて、流れ込んでくる一瞬の感情は、春樹に関してはこの秋の空のように純粹に澄んでいた。

けれども当の春樹はそんな隆也にさえ、隠し事をしている。

隆也を傷つけるかもしれない、決して打ち明けられない秘密……。

「なあなあ。教えてよ」

「・・・そんなこと、教えられない」

春樹は静かに素っ気なく言うのと、再び人混みに足を向けようとした。

「冷たいなあ。人捜しだろ？ 俺も何か協力出来ない？」

「慣れない人がすると警戒されるんだ」

「そう言うもんかなあ。・・・わかった。じゃあ、ここで春樹の仕事っぷりを大人しく見とく」

隆也はニツと笑ってさっきまで女の子3人組が座っていたベンチに腰掛け、コーラのストローに口をつけた。

「そんなこととして遊んでないで、それ食ったら予備校行けよ？」

春樹はどうにもしつこいその友人に思わず笑うと、再び仕事に取り掛かるべく、人ごみに足を向けた。

その友人の視線に、不思議なほど暖かなものを感じながら。

第8話 訪問者（その1）

春樹は次の日も同じように調査に向かい、美沙も相変わらず別件の報告書作成に追われていた。

どうやら春樹の方も昨日は有力な手掛かりが無かったようで、今朝も「今日は頑張るよ」と苦笑いして出かけた。

しかしなぜかその表情は明るく、意欲満々に見えた。もしかしたら彼の中で、なにか良い予感でもあるのだろうか。

一瞬微かに奇妙な不安がよぎったが、まさか報告を怠っているなどという事は無いはずだ。

仕入れた情報はどんなものでも細かく提出する。そんなことは基本中の基本だ。

午後からは自分も調査に加わろう。

そう思いながら美沙は、書類作成を急いだ。

けれど昼近く、少しばかり美沙を困らせる人物がひょっこり事務所を訪れた。

「ところでハニー。君は、いつになったら俺の愛を受け止めてくれるのかな？」

キザな舞台役者のようなポーズとセリフで、男は美沙に微笑んだ。

「そうね、生まれ変わったら考えてみるわ」

けれど手慣れたものだ。

美沙は今日もまた飽きもせずこの鴻上支店に油を売りに来た、無駄に背の高い男に笑いながら返した。

「気の遠くなる話だね」

「あつと言う間よ」

時々ふらりと美沙の事務所^{たちばな・かおる}に立ち寄るその男は、立花探偵事務所所長である立花聡の弟、立花薫34歳。

自称、楽天家の女好き。

『俺ってジュード・ロウに似てるだろ?』と、恥ずかしげも無く言っているほどのうぬぼれ屋だが、日本人離れた彫りの深さや骨格は、英国の血が入っている、少しも不思議ではない。

現在の唯一の悩みは、掛かりすぎたパーマがおでこを全開にしてしまふことらしい。

3年前までやっていた輸入雑貨の経営に失敗し、多額の借金を抱えたまま12歳年上の兄の探偵事務所に転がり込み、仕事に有り付いたちゃっかり者だ。

4年間のイタリア放浪生活のせいか、動きがとにかく大きい。

そんな一見遊び人風な弟だが、カンが良く、人当たりも口もうまいので、調査員としてはとても優秀だった。

兄である立花聡も、そして他の社員も、しぶしぶだがそれを認めざるを得なかった。

趣味は恋愛、特技は交際と自分で言うほどのプレイボーイだが、何故か女子社員からの好感度は高く、シモネタ的な冗談も彼が話すと潤滑油になった。

この男と恋仲になろうとは思わないが、どこか憎めない無害なフェロモンを美沙はけっこう気に入っていた。

実は薫はゲイで、女好きはカムフラージュなんだという噂もあったが、それこそ美沙にはどうだって良かった。

「兄貴がこっちにまわした面倒な家出人調査、手こずってるんじゃない?」

薫は手慣れた様子でサーバーのコーヒーをカップに一杯注いだ。

「心配して来てくれたの？ 大丈夫よ。こっちはそれ専門にやってるから時間もあるし。優秀なスタッフも一人いるしね」

薫はそのコーヒーをそっと美沙の前に置いた。

「ああ、春樹君ね。いいよね、あの子。素直そうでかわいい。ちょっと頼りない感じだけどさ。美沙に食われなきやいいけどって、いつも心配してるんだ」

「本人前にしてよくそんなこと言うわよね。仕事の邪魔しに来たんなら帰ってよ」

美沙は書類をチェックしながら笑いを堪えて言った。
そんな軽口もこの男が言うのと逆に笑えてくる。

「了解。兄貴にどやされる前に帰るよ。あの人、仏顔してけっこう怒ると怖いんだ。まあ、あれだよ、美沙。何か手が足りなくなったら何時でも相談してよ。抱え込まないで。ほんと、遠慮せずにさ」

「うん。ありがとね」

美沙が書類から顔を上げると、薫は軽く手を上げてドアに向かった。たぶん最後のその言葉を言うために此処へ来たことが、美沙には充分伝わってきた。

軽薄そうに見えて、薫は女性調査員への気配りは忘れない。
それは彼の仕事の一環であり、ポリシーなのだろうと感じた。

「あれ？」

帰ろうとドアを開けた薫は、ぴたりと立ち止まった。

ちょうど事務所を尋ねてきた隆也と鉢合わせになったのだ。

「どうしたの？」

首を伸ばして訊いてきた美沙の方を振り返り、薫は真顔で言った。

「ハニー？ 君はもう一人若いツバメを囲ってるのか？」

第9話 訪問者（その2）

「さっきの人は？」

薫が帰っていった後、美沙が煎れてくれたコーヒーを前に、ちょこんと応接セットの椅子に座った隆也が訊いた。

「ああ、本社の人。社長の弟よ」

本日二人目の訪問者も、美沙はにこやかに迎えた。

事務処理はほぼできていたし、あと数件谷川理沙関係で電話を入れれば、手は開く。

時間はあった。

「若いツバメって何ですか？」

「あの人、頭がイカレてるのよ。気にしないで」

美沙は自分のワークデスクに座ったまま、先程薫が注いでくれたコーヒーを啜った。

「美沙さんの恋人？」

思わずそれに咽せそうになる。

「まさか。どうして？」

「ハニーって」

「あの人は頭の方からつま先まで冗談で出来てるのよ。仕事以外の時はほとんど信憑性の有ることは言わないわ」

「それなら良かった」

「ん？　なんで？」

美沙が聞き返すと隆也は居心地悪そうに立ち上がった。

「なんでもないです。仕事中にお邪魔しました。コーヒーごちそうさま」

コーヒーは手つかずのままだ。

「春樹に会いに来たんでしょ？」

居なくて残念だったね」

「近くを通ったもんだから、ちよつと渡しものしようと思って」

隆也は小さな水色の紙袋を持ち上げた。

「渡してあげようか？」

「いえ、いいです。・・・あの、今日も春樹、聞き込みですか？」

美沙は少し驚いて少年を見た。

「どうして？」

「昨日ゲームセンターの前でバッタリ会って。人捜ししました」

「ああ、そういうことね」

「あの・・・、ああいうのって危なくないんですか？」

隆也はもう一度ソファに座ると真剣な目で美沙を見つめてきた。

そこに、今までため込んで来た何らかの想いを感じ、美沙はほんの少し身構えた。

「もちろんよ。危険の無い調査を春樹にはやってもらってる。こんな職業だからね、厄介な調査もあるけど、充分に配慮してるつもりよ」

「本当に？」

「当たり前よ。私だって春樹が心配だし」

「でも、それだったらなんで・・・」

隆也は一度息を呑み、続けた。

「なんで春樹を雇ったんですか？ 俺、春樹は普通に大学行くべきだと思うんです。あいつ、俺なんかより頭いいのに。高卒で探偵とか・・・」

さすがに失言だと思ったのか、そこで隆也は言葉を止めた。

美沙はフツと体の力が抜けるのを感じた。

少なからず自分に敵意を持っているらしいこの少年を前に、ほんの少し身構えていたはずなのに、知らず知らず微笑みかけていた。想いは同じなのだ。

「ありがとうね。春樹を心配してくれて」

美沙がそう言うのと隆也は少し困惑したような目をこちらに向けてきた。

純粹に春樹のことを心配して、氣遣ってくれるこの友人を、心底ありがたいと思った。

彼がいてくれて、本当によかったと。

しかし同時に、何も知らないこの少年がうらやましくもあった。

自分も、そうであつたらどんなに楽だつたらう。

ただただ、春樹を氣遣つていればいいのだ。

もしも今、この少年に自分たちの苦しさを打ち明けたなら、彼は何と云うだろうか。

それでもまだ、彼は同じことを云うだろうか。

美沙に敵意を向けるだろうか。

隆也に向けられた微笑みが一瞬だけ、愚かな自分への嘲笑に変わった。

そんなことをチラリとでも考えてしまう自分に、辟易した。

第10話 レディホーク

――どうしてあんな事を言ってしまったのだろう。――隆也は後悔に背を丸め、両手を握りしめた。

今のはやはり美沙に言うべき事では無かった。

ここに入るのを望んだのは春樹であり、美沙はそれを受け入れただけなのだ。

あの事故のあと、常に春樹を励まし、生活の世話をしてきたのも彼女なのだ。

昔の恋人の弟だというだけで、本当の弟のように接してくれているけれど、さっきの発言に「ごめんなさい」というのも癪な気がして、隆也は俯いたまま口を閉じた。

不自然な沈黙が漂う。

このまますぐに帰るのも後味が悪い気がした。

どうせなら、と思い、隆也は今まで春樹にも面と向かって訊かなかったことを話してみることにした。

「ねえ、美沙さん。春樹は変な癖があるの知ってますか？」

自分のデスクの上のファイルを整理していた美沙が不思議そうに隆也を振り返った。

「癖？」

「昨日あいつ見てて思い出したんです。高校の時から癖が治っていないんだって。女の子が写真見ようとして手を出すと、慌てて手を引っ込めるんです。あいつ高校の時もそうだった。癖って言うより、俺には少し神経質な感じに見えたんです。病的っていうか・・・。女嫌いなのかって訊くと本人は否定するし、癖のことを話題に出すと辛そうな顔するから、もう訊くの辞めたんだけど」

隆也が美沙の方を見ると、美沙は驚いたようにこちらを見ていた。
やはり知らないんだと確信して隆也は続けた。

「人に触れられないない病氣って、あると思いますか？ 潔癖性とは違うみたいだし」

「・・・そうね。そんなふうには見えないわね」
美沙は抑揚のない声で返してきた。

「あいつ結構女の子にモテたし、告白もされたと思うんだけど、全部断ってみたいなんです。でも、女性嫌いじゃないと思うんですよ。女の子とだって仲良く喋るし」

「へえ。そうなの」

「美沙さん、気付いたりしません？」

「さあ。ここには女の子いないから」

美沙は苦笑した。

「美沙さんには？」

「え？」

「美沙さんにも同じような態度をとりますか？」

美沙は困ったように隆也を見た。

「ねえ隆也。私は春樹の上司なの。ここで一緒に仕事してるだけ。春樹の恋愛相談に乗ったこともないし、春樹のその癖にも心当たりは無いの」

隆也は少し頬を赤らめて一瞬口を閉じた。

自分でも話が逸れてしまっているのに気が付いていた。春樹の病的な癖を美沙に確認したかっただけなのに、確実に脱線してしまっている。自分が本当に話したい方向へ。

もう軌道修正出来そうにない。

「春樹は女を好きにならないのかと思ってたけど、そうじゃないのかもしれない」

「ん？」

「春樹は美沙さんが好きなんじゃないかと思うんです。もしそうなら・・・」

美沙が美しく整った顔を硬くしたのが感じられた。

「したら何か、春樹の中のいろんな問題が解決されそうな気がしたんで・・・」

語尾が濁った。

こんな事を言ったのがバレたら春樹に軽蔑されるだろうか、という不安のせいで。

しかしもう、完全に軌道修正はできなかった。

「春樹は良い友人を持てたよね。羨ましいよ。まあ、・・・ちょっとお節介が過ぎるけど」

美沙は自然な笑みを浮かべながらそう言うと、サイドテーブルの新聞を手にとって眺めた。

訳の分からない厄介な話を振られて、答えに困っているようにも見える。

それはそうだろう。

保護者としてではなく、別の意味で『友人を頼みます』と遠回しに8つも下のガキに言われたのだから。

けれど隆也は美沙の答えをじっと待った。

美沙が本当のところ、どう思っ春樹を側に置いているのか知りたかった。

「ああ、これ懐かしいな。この映画」

美沙は唐突に新聞広告の、DVD通販の欄を眺めてそう言った。隆也の質問は忘れてしまったかのように。

「映画？」

「うん。この映画知ってる？ 『レディホーク』。私、小学生のこ

る観たのよ。TVでね。随分昔の映画だけど、映像が綺麗だった。

ジャンルはファンタジーなのかな、それともアドベンチャー？」

その笑顔は少女のようだったが、話をはぐらかされた隆也は少しガツカリしていた。

「さあ。そんな映画知りませんけど」

隆也の声に苛立ちが混ざった。

「あの頃はこの映画の男女の本当の切なさが分からなかったけど、今なら分かるな。嫌になるくらい」

「だから、知らないんですってば」

「うん。知らなくていいのよ」

「・・・」

美沙は笑ったが、隆也はそこに一瞬何とも言えない冷たい空気を感じた。

いや、“壁”だったろうか。

「私と春樹はこの中の主人公の二人に似てるなって。・・・何となく今、そう思った」

隆也は何と返せばいいのか分からなかった。

どういう意味なのだろう。

帰るタイミングを計りながら、まだ手を付けていなかった冷めたコーヒーを啜った。

『知らなくていいのよ』

美沙の言葉に釈然としない拒絶と疎外感を感じながら、隆也はコーヒーの苦みを飲み下した。

もしかしたらこの話題は、自分が入ってはいけない《立ち入り禁止区域》だったのだろうか、と思いながら。

第11話 孤独

春樹は携帯の時間を確認した。

午後6時過ぎ。

2時間おきに調査の状況を連絡するように言われていたが、ついつい忘れてしまい、痺れを切らせた美沙から本日2回も電話が入ってきた。

その都度、叱られる。

春樹を心配して美沙が作ったルールだが、子供扱いされているようで春樹はそれに不服だった。

つい1時間前にも『もう今日は引き揚げなさい』と電話で言われたばかりだが、正直なところ、たいした成果を上げることなく、大人しく帰るのは癪だった。

何か掴みたい。

昨日聞き出した「ミツヒロ」という男性についても、もう少し正確な情報を集めてからにしたいと、美沙には報告してなかった。

今日、谷川理紗と平行してミツヒロという21、2歳の青年を捜したが、手がかりになる情報は入ってこなかった。

失踪して2カ月。

どこかでこっそりバイトでもしてるかもしれないと思い、カフェバーや飲食店、普段入ったことも無いような怪しげなホビーショップにも足を運び、店長に情報協力を頼んで回ったりもした。

もう少しすればこちら辺を遊び場になっている若者に代わり、学校帰りの中高生が溢れてくる。

彼らからはあまり情報は得られそうにない。

その前に出来るだけ成果を上げたかった。

「え？ この女の子？ 見たこと無いなあ」

悔しいが、今日はこれで最後にしようと思いながら、ビデオシヨップの前でぼんやりタバコを吸っていた背の低い男に声をかけた。耳に3つも4つもピアスを付けたその短髪の男は、興味無さそうにそう言った。

「じゃあ、ミツヒロっていう男の人は知りませんか？ 二十歳過ぎの背の高いガツチリした人で、よくこの先のゲームセンターに顔だしてるそうなんですが」

男は眠そうな目で春樹を見上げ、ニヤリとした。

「へえ、その男と逃げたの？ この子。ヤルねー。毎日イイコトしてるんじゃない？ 放つといてやれば？」

明らかに楽しんでる風の下卑た笑いを浮かべる男に春樹は心の中でムツとした。

「知らないんだったらいいです。ありがとうございました」

調査中に「余計な感情を出すな」と3カ月間の研修期間中に講師に何度もたたき込まれた。

研修は高い成績でクリアし、18歳で事務所に入ることを許された春樹だが、疲れて焦りが募ると、まだ多感なこの少年は、時たまタブーを犯してしまう。

「あっそ。まあ、がんばってね」

やはり薄ら笑いを浮かべたままそっぽを向いた男に軽く一礼すると、春樹は明らかに落胆した表情で駅に向かった。

今日も一日、自分は何の役にも立っていない。その事が腹立たしく、情けなかった。

これから開店する風俗関係の店も当たって見ようかとも思ったが、それだけは美沙に堅く禁じられていた。

駅までの道を歩きながら春樹は再び携帯を確認した。

やはり情報提供の着信は入っていなかったが、メールの着信が一件

あった。

隆也からだ。

『お疲れさま〜。』

仕事が終わったら一緒に晩飯食おう！

今夜うちの親、帰って来ないみたいだから、うち来るか？

酒もあるしさwww』

最後に嬉しそうなピースの絵文字があった。

思わず春樹の口元に、フツと笑みがこぼれる。

こんな気分の時には、優しい友人のメッセージが胸にジンと来る。
失いたくないと思った。

この友人とは何時までも変わらない関係でいたいと思った。

幸せはいつまでも続かない。必ずそれはいつか崩れてしまう。

春樹はそう思っていた。

自分の大切な人はなぜか、春樹の前から居なくなる。

父も、母も、兄も。

美沙もきつとそうなのだ。

自分がカミングアウトしてしまったせいだ。

きつといつかは美沙も離れていってしまうに違いない。

あと、どれくらいこうやっていられるだろう。せめて、その時が少しでも長ければいいのにと。

春樹は足元からじわじわと這い上がって来る孤独と不安を感じながらゆっくりと歩いた。

空はいつの間にかすっかり暮れ、長い高架下のトンネルは雨も降っていないのに黒く寒々しく濡れていた。

ひび割れの目立つそのトンネルは、車は割とよく通るものの、以前痴漢が数件発生したということで、人通りはあまり多く無かった。

オレンジのボンヤリしたライトの下、春樹は、隆也に何と返事をしようかと眩しいモニターを見つめていた。
後ろから近づく足音に、何の警戒心も抱かずに。

第12話 浸食

高架下トンネルの、ちょうど中程だった。

メールの返信は駅に着いてからにしようと、携帯をポケットに滑り込ませた直後に「それ」は春樹に襲いかかってきた。

いきなり背後から麻袋のような物を頭にかぶせられ、その後背中を強く蹴られて地面に叩きつけられた。

咄嗟に手を出し、顔面を打ち付けるのは免れたが、腕に激痛が走った。

一瞬何が起こったか分からず、春樹はただ必死で体をねじりながら、頭から麻袋を外そうと藻掻いた。

しかし窮屈な袋に掛けた手は恐怖に震えて思うように動かない。

パニックを起こしたようにアスファルトの上で藻掻く春樹の脇腹に、再び激しい蹴りが入った。

苦痛に小さく呻き、それ以上の攻撃を恐れて背を丸めた春樹を見下ろし、あざけるように、その人物は鼻を鳴らした。

そして更に春樹の背とわき腹を何度も執拗に蹴り上げた。

春樹がもう声も出さず、ただ石のように丸まってしまうと、その何者かはゆっくりと春樹の横にしゃがみ込み、少し脱げ掛かった麻袋を食い止めるように、そして更なる恐怖を味わわせて楽しんでもいるかのように、その首にがっしりとした腕を巻き付けてきた。

苦しくて払いのけようと春樹が出した手が、その「男」のむき出しの腕をつかんだ。

春樹は雷に打たれたようにビクリと体を震わせた。

“それ”は蹴り上げられた事よりも、痛烈な痛みを伴って春樹を貫いた。

一瞬動きを止めた春樹を観念したと思ったのか、その男は春樹の耳元に顔を近づけ、押し殺した声で言った。

「ゴソゴソ嗅ぎ回るなクソガキ！ いい加減やめないと次はぶっ殺す！」

けれど春樹は硬直した両手に力を入れた。

破裂しそうに激しく打つ心臓の悲鳴に逆らいながら。

呼吸が苦しい。

いつ切ったのか口の中に血の味が広がり、体中が痛み悲鳴を上げていたが、春樹は更に力を込めて男の腕を掴んだ。

そこから春樹の戦いだった。

取り入れなければならぬ情報と、決して覗いてはいけない情報との間で、春樹は引き裂かれそうになりながら戦っていた。

男が春樹の動きを不気味に思い、もう一度脇腹に強い膝蹴りを入れるまでそれは続いた。

あまりの鋭い痛み途切れそうな意識の中で、春樹は男の足音が遠のいて行くのを聞いた。

自分がアスファルトに頬をつけ、転がっているのにその時初めて気付いた。

車が一台、小さくうずくまった春樹に気付かず、脇を通り過ぎて行く。

脇腹に負担が掛からないように何度か浅く呼吸したあと、痛む腕でゆっくりと頭から麻袋を外した。

暗いはずの蛍光灯の光さえ、痛いほど眩しく目に刺さってくる。

突然からだの小刻みに震え始めた。

そして込み上げてくる吐き気に耐えられず体を捻って嘔吐した。

口腔内の血と混ざった胃液がアスファルトの上に黒いシミを作った。
壊れてしまう。

初めてそう思った。

のどの奥が震え、うまく呼吸出来ない。

浅く早く息を継ぐが、酸素が入ってこず、頭が朦朧としていく。

さっき感じた物よりも更に大きな恐怖が地面から這い上がり、病的なまでに手が震えた。

ここにいたらだめだ。

震えの酷くなる冷たい手で春樹は携帯を取りだした。

左手で右手を包むようにして震えを止め、アドレスから名を選ぶとボタンを押した。

お願い、出て。ここにいたくない。一人で居たくない。

春樹は心の中で懇願しながら携帯を耳に当てた。

コールが少し間を置いて始まった。

1回、2回・・・

乱れた服装で高架下の黒い壁際に座り込んでいる春樹を、通過する車のドライバーが嫌な物でも見るように一瞥してゆく。

4回、5回。

6回・・・

春樹は息を震わせて目を閉じた。

7回目のコールが終わる直前、携帯から快活な声が響いてきた。

「おう。どうした？ 春樹。仕事終わったのか？」

安堵で全身の筋肉の強ばりが一瞬抜けるのを感じた。

しばらくそのまま声を出せずにいた。

「あれ？　どうかした？　電波悪い？　メール見て掛けてきたんだろ？　春樹」

春樹はゆっくり息を吸い、震えないように声を出した。

「うん。メール見た。・・・あのさ、隆也。今、時間ある？」

「メール本当に読んだのか？　暇だから送ったんだろ？」

いつものように屈託無く笑いながら隆也が言った。

春樹は込み上げてくるものをぐっと堪えた。

「隆也・・・あのさ、頼みがあるんだ。・・・迎えに来てくれないかな。ちょっと・・・足、痛めちゃって」

「え、どこで？　捻挫でもしたのか？　工作中なんだろ？　美沙さんに連絡した？」

「美沙には言わないで！」

思わず荒げた声に隆也が息を呑むのが感じられた。

「・・・わかった。すぐ行く。どこにいる？」

もう隆也の声は笑っていなかった。

春樹は正確な場所を伝えると、「ごめん」とだけ言って電話を切った。

隆也が来てくれるまで何も考えずにいられるだろうか。

春樹は震えの止まらない両手をじっと見た。

あの男をつかんだ感覚が生々しく残っている。

流れ込んだ記憶が確実に春樹の心を浸食してくる。

自分自身がどうしようもなく醜く、薄汚い生き物になってゆく気がした。

「あれ？　ねえ君、怪我してるんじゃない？　大丈夫？」

仕事帰りのサラリーマンと言った感じの大柄な男性が心配そうに近

づき、シャツが破れて血が滲んだ春樹の左肘あたりにそっと手を伸ばしてきた。

「触らないで！」

身を固くして叫んだ春樹の声に驚き、その男性は数歩後ずさった。春樹はうつろな目で男性を見上げた。

「ごめんなさい。・・・大丈夫です。ごめんなさい。だから・・・お願い、僕に触らないで」

再び伏せたその目から、堪えていた涙がこぼれ落ちた。

第13話 嘘

隆也がその駅に着いたのは、春樹から電話をもらってほぼ40分後だった。

妙な胸騒ぎを覚えながら説明された場所まで走ったが、春樹を見つけるまで少し手間取った。

てっきりその高架下で待っていると思ったのに、春樹はそこから地上に上がった所にあるテナントビルのガレージの隅にぽつんと座っていた。

薄暗い街灯の下で、その姿は闇に溶けそうに心もとなく、隆也は訳のわからない不安を感じた。

シャツの肘の部分から血が滲んでいる。

ギョツとして走り寄った隆也を見上げ、春樹は笑いかけてきた。

「ごめん、隆也。早かったね」

目が少し赤い。

けれどもさっきの電話の時とは別人のように、しつかりとした声だった。

何があったのか訊いてみたが春樹はただ「後で話すから」としか言わなかった。

足は大丈夫そうだが、脇腹が痛くて歩けないらしい。

けれどもなぜか隆也が差し出した手を春樹は拒んだ。

「肩を貸してくれる？ このほうが楽なんだ」

そう言って、隆也のジャケットの肩に、そっと手をかけてきただけだった。

側を走り抜けようとしたタクシーを止め、二人で乗り込んだ後、隆也はジリジリしながら「その説明」を待った。

けれど春樹は少しブーツとしたように隆也を見つめ、
「そうか・・・一人でタクシー拾えば良かったんだよね。なんで思いつかなかったのかな。こんなところまで呼び出しちゃってごめんと、小さく、そう言ったただけだった。」

「誰かにやられたんだろ？ 何で隠すんだよ」

ついに痺れを切らし、マンションの部屋で、春樹が泥や血で汚れたシャツを脱ぎ捨て着替えるのを見ながら隆也が訊いた。

棘のある訊き方になったのは、承知の上だ。

自分を頼って迎えに来させたくせに、この友人は何も説明してくれない。隆也はそれが腹立たしくて仕方なかった。

「違うって。僕の不注意で、バイクにちよっと接触して転けたんだ」

「嘘つけ！ 殴られたようなアザがいっぱいある！」

春樹は乱暴に洗った左肘に大判の絆創膏を何枚も貼り付け、無理やり止血したあと、新しいシャツを羽織った。

何も答えない春樹に隆也は次第にイライラしてきた。

「美沙さんはこの仕事は危険じゃないって言ってたけど、大嘘じゃないか。もういいかげん辞めちまえよ」

「仕事のせいじゃない。これは、僕が不注意だったからだよ」

「不注意でこんな怪我するんなら、凡ミスで命無くなるよ！」

春樹はそう叫んだ隆也にほんの一瞬視線を向けたが、何も言わず再び身支度を整え始めた。

「どっか行くのか？」

驚いたように隆也が訊いた。

「うん。急ぐんだ、ごめん。送ってくれてありがとう」

「まさか・・・無理だろ？ まだ痛むんだろ？ 病院か？ そんな

ら送って行く」

「仕事にもどる」

そう言うとうちの呼吸を落ち着かせるように大きく息を吸い、春樹

は携帯に電話をかけ始めた。

隆也が声を荒げた。

「はあ？　なんで？　無理だろ、さっきまで歩けなくて助けを呼んだの誰だよ」

けれどその訴えは春樹に届かなかった。

電話口に出たらしい相手に向かって、春樹は落ち着いた声で話し始めた。

「美沙？　連絡入れるのが遅くなってごめんなさい。・・・怒らないでよ。携帯の電池切れちゃってさ。充電器取りに一回家に帰ったんだ。今からすぐそっちに戻るから。彼女の居場所が分かったんだ。うん、谷川理紗の。本社の協力がいるかも知れない。帰ったら詳しく説明するから、その事だけ急いで立花所長に伝えて欲しい」

少しの嘘を混ぜながら、大人びた口調で喋る春樹は隆也の知らない人間のように思えた。

パタリと携帯を閉じて春樹は、隆也をゆっくり振り返り、ぎこちなく笑った。

「ありがとう。・・・ごめんね、隆也」

そう呟いた顔が、なぜか泣き出す寸前のように見えて、隆也は喉まで出かかった幾つもの質問をぐっと胸の中に押し込まなければならなかった。

何かが彼を極限状態にしている。

今、自分のイライラを晴らすために少しでも辛辣な言葉を掛ければ、こいつは壊れてしまうのではないか。

根拠のない不安が生まれ、隆也はただ春樹に向かって、小さく頷く

ことしかできなかった。

第14話 その心が見たもの

「谷川理紗の居場所がわかった」

落ち着いた声で春樹がそう言ったとき、美沙は冷たい鉛を胃に落とし込まれたような嫌な感覚を覚えた。

聞き込みで情報を手に入れた時の春樹はいつも、自分の手柄に喜々とし、幼いまでに喜びを前面に出す子だった。

今回は、情報入手の手段が違うのだ。

美沙はそう感じた。

そしてそれは、間もなく事務所に帰ってきた、青白く人形のように表情を殺した春樹の顔を見て確信に変わった。

「春樹、いったい・・・」

「説明するよ。なるべく急いだ方がいいと思うんだ。書き出すからちょっと待ってて」

春樹はいつさい余計な無駄口をきかず、机の上に置かれていたルーブリーフに文字を書き始めた。

脳に記憶された情報を、消える前にすべて完璧に書き出そうとするかのように、春樹の右手は素早くシャープンを走らせてゆく。

無言の気迫に美沙はしばらく口を挟むことができなかった。

A4のルーブリーフは春樹の記憶から取り出された情報で次第に埋まっていた。

美沙はその文字を追う。

男の名、町名、私鉄の駅名、部屋番号。

そのマンションの外観。男の部屋の窓から見える特徴的な建造物。

「男の名は間宮光浩。部屋番号は304で間違いないんだけど、マ

ンションの名が全く思い出せないんだ。建物を見たらハッキリすると思うんだけど。この駅が最寄り駅だってことは確かなんだ。あとで他に思い出した事があったらそのつど教えるよ」

「この男の所に谷川理紗がいるのね？」

「確実に」

「春樹、この情報をどうやって・・・」

「そんなことより、急い方がいいと思うんだ」

春樹の鋭い声に質問を遮られ、美沙は息を飲み込んだ。

「それは彼女の身が危険だということ？ 怪我でもしてるの？」

「命の危険はないと思う。だけど早く見つけてあげなきゃ。これくらい情報があったら探せるよね。本社の人、何人か協力してもらえるんでしょ？ 所長に連絡入れてくれるように言ったよね、美沙。」

来てもらってよ、今すぐに」

春樹の声は次第に懇願と苛立ちに変わった。

部屋は肌寒いはずなのに、青白いそのこめかみに汗が浮かんでいる。

「春樹、・・・あんたどっか具合悪いんじゃないの？」

「そんなこといいから、早く！」

「・・・わかった」

美沙は気圧されたように受話器を上げると本社の短縮を押した。

所長の立花聡からすぐに3人応援に回すという返事をもらい、それを伝えると、春樹はようやく少しホッとしたように椅子の背に体を沈め、目を閉じた。

けれど、それを見つめる美沙の目は穏やかではなかった。

「春樹、教えて」

立ったまま声を落としてそう言うと、少年はゆっくり視線を上げ、美沙の目を見つめた。

さっきまでの勢いは消え落ち、今はまるで罪を審議される被告人のように、その目は不安げだ。

「その男に触れたのね」

少年はその言葉に肯定も否定もせず、ただ大きく目を開け、鋭いま
でにまっすぐ美沙を見つめた。

「どうやって谷川理紗と一緒にいる男だって突き止めたの？ 2日
の間に。それにもしそれが分かったとして、どうしてこんなやり方
で情報を引き出そうとするの？ その前に私に連絡を入れるべきな
のよ、あなたは」

春樹は視線を外さなかった。

「フェアじゃない？ こんなやり方」

「え？」

「卑怯？ それとも、化け物じみてる？」

「・・・何を」

美沙は少年の口元に絶望的な笑みを見つけた。

「春樹？」

少年はゆっくり目を伏せた。長いまつげが震えている。

「ねえ春樹、いいかげんにして。いったいどうしたのよ。あなたは
何を見たの？」

春樹は目を伏せたまま、ゆっくり首を横に振った。

「・・・言っているのか、分からないんだ」

その声は微かに震えていた。

「言ってよ。それが彼女を捜す役に立つかもしれないでしょ？」
けれど春樹は再び首を横に振った。

「じゃあ、それはその男のプライベートなの？ それだったら、貴
方の胸にしまっておけばいい。無理に伝えようとして苦しむことは
ないでしょ？」

春樹は今度は動かなかった。

美沙は困惑気味にワザと聞こえるように大きくため息をついた。
そんな些細なことさえ、この少年にダメージを与えることに気付かず。

「まあ、どっちにしても貴方の情報が正しければ彼女は見つかる。
彼女を見つけて、そして家に帰して、それで私たちの仕事はおしま
い。ね？　そうでしょ？　春樹がそこまで苦しむことは何もないじ
ゃない」

「・・・おしまいなんかじゃない」

春樹が小さく言った。

「どうして？」

美沙が、なるべく優しく聞こえるように辛抱強く言うと、春樹はや
っとゆっくり顔を上げ、口を開いた。
その目は泣いた後のように赤かった。

「あの子は・・・、谷川理紗は、あの男にレイプされてた・・・」

第15話 不可解

隆也は、美沙の事務所のあるビルの隣のファーストフード店で一人、携帯を覗き込んでいた。

「『レディホーク』。中世ヨーロッパを舞台に、呪術を掛けられた男女が呪いを解くために戦う、壮大なファンタジー。・・・って？」
一人で画面を睨み、つぶやく。

あれから一人でタクシーを拾い、事務所に行ってしまった春樹がどうにも心配で、ついつい隆也自身も近くまで来てしまったのだ。体中、随分酷い暴行を受けたように見えるのに、美沙には言うなど言った春樹の言葉が頭から離れない。

けれど、家出少女のことで緊迫しているらしい事務所に顔を出せるはずもなく、隆也はただ悶々とそこで時間を潰すしかなかった。

――『昼間は鷹、夜は人間にもどる美しい女と、昼間は人間、夜はオオカミに姿を変えてしまう黒騎士。愛する二人に掛けられた残酷な呪いを解くために、彼らは悲しい旅の果て、魔術を操る大司教に立ち向かう』――

映画の紹介ページには、肩に一羽の鷹を乗せた黒騎士の美しい画像が貼り付けられている。

隆也はそれをじっと見ながら眉をひそめた。

なんでこれが美沙さんと春樹なんだよ。ファンタジーじゃないか。春樹はこんなたくましい騎士じゃないし。・・・自分が美女だからってか？

隆也はフンと鼻を鳴らした。

改めて隆也は、自分があの女に反感を持っているらしいことを、ボシヤリ確認した。

春樹を想えば想うほど、それはここ最近、強まっている。

目の前の通りに目を移すと、ゆっくり走りすぎてゆく車の中に見覚えのある男の顔を見つけた。

きのう美沙の事務所で会ったキザなラテン男だ。

他に数人、スーツの男が乗っている。

ゆっくりとパーキングの方へ向かうのを見て隆也は、春樹が言っていた「仕事」が慌ただしく動き出したのだと悟った。

自分が心配したところで始まらない世界で春樹は生きてるのだ。

隆也は無力感と、ほんの少しの寂しさを感じた。



立花薫を含めた本社メンバー3人の協力のもと、谷川理紗の搜索は迅速に進められた。

春樹が美沙に打ち明けた谷川理紗の被害については「体調を崩している可能性がある」と言う風にだけ3人に伝え、猶予が無いことを促した。

春樹の情報を元に手分けして探し回り、翌朝8時にはそのマンションは突き止められた。

春樹もそのマンションで間違いないと画像メールで承認し、美沙と二人、その場所に向かった。

あとはその部屋を慎重に尋ねていくだけだ。

来客に不審を感じさせる時間を割け、朝9時まで待った薫がドアホンを押したが、何も反応は無かった。

少し時間を置き、美沙が試したが、やはり同じだった。

他のメンバーを帰した後も一人現場に残った薫は、冷え込みに震えながら美沙と春樹に言った。

「さっきあの部屋に宅配便が来たけど、荷物もって帰っちゃったろ？ 谷川理紗が一人部屋に居るなら出てくるだろうし。二人して仲良くお出かけとかなんじやない？ まさか監禁って事はないよね。だったらここは探偵じゃなく警察の出番だ。・・・まあ、すべては本当に谷川理紗がここに居ると過程してだけど」

小さく肩をすくめた薫に、美沙は小さく「大丈夫」と言っただけだった。

薫と美沙、そして春樹が立っているその場所からは、各部屋の玄関ドアが見渡せる。

3人は不審がられないように注意を払いながら304号室を監視していた。

「ここで間違いないんでしょ？ 春樹」

美沙が昨夜一睡もしなかったであろう春樹に改めてそう聞くと、春樹は黙ったまま頷いた。

「じゃあ、ここで間宮が帰るまで持久戦だな。・・・ところで春樹君」

薫は少々芝居がかった口調で春樹に視線を向けた。

春樹も薫を見る。

「そろそろ話してくれてもいいんじゃない？ どうやってお手上げ状態の少女の居場所を突き止めたのか。まず、現場の外観から探し始めるなんて奇妙な搜索の仕方も初体験だ。どうやって見当を付けたのか、教えてくれないか？ これからの参考にしたいしさ」

薫は舞台役者のような掘りの深い顔で優しく笑った。

そこには本当にそれ以上の嫌らしい意味は感じられない。純粹な好奇心だという事が伝わってくる。

けれど春樹には答えられるはずもなかった。

「地道な聞き込み調査の集大成よ。小さな目撃情報を寄せ集めて検討していく。二日間、春樹は必死でやったのよ」

口を閉ざしている春樹の代わりに美沙が答えた。

薫が「へー」と言っけきりりとした眉を上下させ、二人を交互に見た。

「そんな薄い情報で僕らを動員したのかい？ 勘違いとか考えずに？ 時間の猶予が無いっていうから、僕らは貫徹で動いたんだよ？

あ、いや、怒ってる訳じゃないんだ。ちょっと意外だったもんで」
「大丈夫よ、確かだから」

美沙はきっぱり断言すると視線をまた304号室のドアに移した。

それ以上は訊いても答えないという、無言の意思表示だ。

薫は再び肩をすくめ、諦めたようにクスリと笑い、そして今度は小声で堅い表情の少年に話しかけた。

「ねえ・・・君はそんなに無口な子だったかなあ、春樹君」

春樹は驚いたように薫を見上げた。

けれど、頭一つ分春樹より背の高い薫は春樹を見下ろし、優しげに笑っていた。

「特別な調査ルートを持ってるんだよね、君は。いずれ君と仲良くなって、ゆっくり教えてもらおうよ。でもさ、僕にはどうしても今すぐ知りたいことがあるんだ」

薫はふざけた調子で春樹の肩をぐっと握り、不意に引き寄せた。

春樹がびくりと体を強ばらせたが、どちらかといえば無神経な薫がそれを察することはなかった。

「どうやったら美沙にそこまで信頼されるんだい？ 美沙は僕のことを軽薄な遊び人くらいにしか見てくれなくてさ。愛をささやいて

もを鼻で笑うんだ。君が羨ましいよ。なんか魔法があるんなら教えてくれないかな」

「立花さん、静かに！」

美沙がたしなめるように小声で言うのと同時に、薫の手の中から逃れようとして、春樹は勢いよく体を退いた。

けれどその衝撃で春樹は脇腹に鋭い痛みを感じ、声を出さずに顔を歪めた。

「ん？ どうした？ 君、顔色悪いよ。具合わるいんじゃない？」

再び薫が春樹の肩に手を伸ばそうとした瞬間、マンションをじっと見ていた美沙が言った。

「誰か帰ってきた！ 春樹、あの男が間宮なの？」

春樹と薫がハッとしてマンションのドアに目を移した。

黒い光沢のあるジャケットを着た男が鍵らしきものを弄びながら、ゆっくり304号室に近づいてく。

「あいつだ」

春樹は押し殺したように小さく言った。

いつになく重く鋭いその声には、激しい怒りと嫌悪が込められていた。

第16話 呪い

谷川理紗の確保は、驚くほどスムーズだった。

その男、間宮光浩が帰ってきたすぐ後、美沙と薫が部屋を訪れ、身分を明かしながら「ここに谷川理紗さんがいると聞いたんですがね」と硬い口調で言うと、間宮はいかにも優しげに「ええ、行き場が無いって言うんで、泊めてあげていました。俺もそろそろ家に帰った方がいいよって説得してたところなんです」と笑った。

シンプルなロングスカートと白いセーター姿で出てきた谷川理紗は、化粧っ気のない青白い顔で「帰ります」と小さく呟いた。

その視線はボンヤリして、だれに呟いたのかも分からない。

『何かで脅されている』

美沙の直感がそう確信していた。

けれどもその場は間宮に礼を言う形で部屋を後にするしかなく、美沙はただしっかりと谷川理紗の肩を抱くようにして車まで歩いた。当然ながら美沙には間宮を咎める材料も、職権も無いのだ。

階段を降りながら、薫は参りましたとばかりに、ヒューと口笛を吹いた。

「春樹君の情報は正確だったね。こりゃあ、たいした調査員になりそうだよ彼は。・・・ところで春樹くんは？」

薫は車に辿り着いた所で初めて春樹がいないことに気がついたらしい。

薫の車に少女をいたわるように乗せたあと、美沙が口を開いた。

「3人も要らないと思って先に事務所に帰ってもらったの。春樹もそうしたいって言うから」

「へえ」。案件解決の瞬間を見ないとは欲がないねえ。もしかした

ら俺に気を遣ってくれたのかな？ たまにはハニーと二人にしてあげようとか。そうだったら逆に俺、あの子に惚れるな」
薫がふざけた調子でそう言うと、少し間を開けてから美沙は、ほんの少し笑った。

薫が居てくれて良かった。

美沙は心底そう思った。

美沙だけでは、その場の重苦しい空気に押しつぶされてしまっただろう。

美沙の横に人形のように身じろぎもせず座り、ボンヤリした目で前を見つめている少女は、傷つき心を塞いでいる。

あの男に脅されているのは確実だった。映像なのか、写真なのか。

その脅しが子供だましであり、行使すれば間宮自身を滅ぼすことに、この子は気付かない。

これからが問題なのだ。

少女に真実を語る勇気が無ければ、誰もあの男を裁けない。

突然運転席のラテン男がしゃべり出した。

「理紗ちゃん？ もう家出なんかしたらダメだよ。たっくさんの人が君を心配して捜してたんだから。外には君が知らない危険がいっぱいなんだよ。たまにはご両親の気持ちになってみないと。ね？」
あまりにもありきたりのお小言を語り始める薫。

今は余計なお説教はやめるように言おうとした瞬間だった。

谷川理紗は両目から大粒の涙をこぼし、「ごめんなさい」と掠れた細い声を出した。

「あ、・・・いや、ごめんね。泣かなくていいからね？ ごめんね、理紗ちゃん」

薫はその気配に慌てて取り繕い、美沙は少女の肩を優しく抱いて引き寄せた。

少女の頬をなでて軽く額をくっつけ、薫に聞こえないように「もう大丈夫だから」とささやいた。

少女の肩が激しく震えだし、美沙はそれを受け止めるべく、更に強く抱きしめた。

こんなふうに春樹を抱きしめてやれたなら。

美沙は少女の悲しみと後悔を受け止める傍ら、春樹の事を想った。その想いは、やり場のない怒りにも似ていた。

『ねえ美沙。僕は谷川理紗に会わなくてもいいでしょ？』

昨夜、全てを打ち明けた春樹は苦しそうにそう言った。

『会いたくないなら』

美沙はあえて短くそう言った。

『会えるわけ無いじゃない』

春樹の口元にまた、あの自分をさげすむような笑みが浮かんだ。

『うん、もう分かったから。春樹』

美沙がやんわりと遮った。その先は聞きたくなかった。

『美沙が何を思ってるか分かってるよ。いろんな想像が湧くよね。』

僕はあの間宮に触れた。自分からしがみついた』

『もういいから、春樹！』

『でも、本当のところ分かってないんだ美沙は。僕は男で、・・・』

美沙は女だから』

『分かってるって言うてるでしょ！？』

美沙は机を両手でバンと叩いた。けれど、春樹を止められなかった。

『僕は全部見たんだ。あの男の目を通して。あの男の汚らしい感情と一緒に。僕には映像と一緒に触った人間の感情も取り込んでしまっただ。僕には、全部』

『はる・・・』

春樹は両腕で自分を抱え込むようにして続けた。

『でも、彼女を捜さなきゃと思った。情報を手に入れなきゃと思ったから、あいつの手を放さなかった。あの子が泣き叫んで、男は狂喜して興奮して・・・その声が頭の中に響いてるのに』

『やめなさいってば!』

『でも、それでいいんでしょう? そうやって情報を手に入れて彼女を救うのが僕の仕事なんだから。間違っていないよね』

美沙は声が出せず、ただ春樹を見つめた。

『僕がしたことは何? 彼女の居場所を突き止めた。そして、その後、僕も彼女を汚したんだ』

『・・・そんなこと・・・』

『あの男と同じ事を僕は体験したんだ。泣き叫ぶ彼女を押さえつけて、あの男の興奮を借りてじっと見つめてたんだ。僕が聖人君子のようにそれを冷静に受け止められたと思う? 自分の中の汚い部分があつた男と同調した瞬間を忘れることが出来ると思う?』

『あなたは少しも悪くないよ、春樹。自分を責めないで。あの子を探すことだけ考えよう? ね。他のことは全部忘れなさい』

美沙は少年を哀れむと同時に、腹立たしくて叫びそうになる感情を堪えるのに必至だった。

“じゃあ、どうしろっていうのよ! 私が何って言えばあなたは満足? あなたもあの男と同じ人種だと?”

そんなことを言えば間違いなく少年は壊れてしまう。

自分にはこの少年を救うことができない。

常にナイフを自分自身に向けているこの少年を。壊してしまうことなら一瞬で出来るというのに。

春樹は赤い目を美沙に向けてきた。

そして懇願するように、か細い声でつぶやく。

『ねえ美沙。僕は彼女に会わなくてもいいよね?』

それが、自分をコントロール出来なくなった時に見せる、痛いほど激しい彼の甘え方なのだと美沙は知っていた。

自分をさらけ出し、自虐的に自分を傷つけて血を流しながら美沙に手を差し伸べてくる。

まるで小さな子供のように。

その姿が愛おしくて堪らなかった。

春樹に近寄り、ジャケットを羽織ったその肩にそっと手を置いた。けれども胃の辺りから、背中から、染み入ってくる恐怖心に、再びその手を放すしかなかった。

・・・どうしてこの子を抱きしめてやれないのだろう。

力の限り強く抱きしめ、その頬に優しく触れてやりたい。

もしかしたらこの子は心のどこかでそれを望んでいるかも知れないと言うのに。

誰が私たちにこんな残酷な呪いを掛けたのか。・・・

美沙は事務所に向かう車の中で、少女の体を強く抱きしめながら、悔しくて涙が溢れてくるのをぐっと堪えた。

第17話 追及

谷川理紗を無事に両親の元に帰したことを、たった二行の文字にしてメールで送ると、自宅に居たらしい春樹は、程なく事務所に戻ってきた。

「少しは眠れたの？ まだ顔が青いよ」

そう言ってみたが春樹はそれに答えず、美沙のデスクの横に静かに立った。

けれど美沙と微妙に視線をそらし、黙っている。そのわけを美沙は承知していた。

「谷川理紗にはそつと手紙を渡しておいた。何か酷いことをされたのであれば必ず母親に言うこと。とても大事な事だから、慎重に考えること。そして法的対処を望むなら全面的に力になるから、私に連絡して来なさいって書いてね。母親にも、なるべく深く彼女からいろんな話を聞き出すように伝えておいた。精いっぱいやったつもりよ。それ以上は踏み込めないし、私たちの仕事の範疇を越えるからね」

春樹は顔を上げた。

「もし彼女が何も行動を起こさなかったら？ あんな男が平気でのさばってるのなんて許せない」

「悔しいけど今回のケースは仕方ないのよ。何の証拠もないの」

「でも事実なのに！」

春樹は鋭く言った後、少し苦しそうに顔を歪めた。

「もうここから先は本人に任せるしかないの。こちらが変に騒ぎ立てると、逆に彼女を傷つけてしまうかもしれない。本人が決める事なのよ。身勝手な家出をした彼女にも責任がない訳じゃないし」

「そんな。まだ子供なのに、責任なんて・・・」

「じゃあ、『僕は犯人に触って、彼女が襲われるところを見ました』
っていうの？ 警察に！」

知らず知らず、美沙も限界に来ていたのか。

思わずその言葉が口について出てしまった。

しまったと思う反面、ほんの僅かに、その正論ばかりぶつけてくる
少年に釘を刺したい冷たい感情を、自分の中に感じた。

怒りとも悲しみともつかない青白い表情で、春樹は美沙をみつめた。
そして口を硬く結んだ。

そうすることで自分の感情を内側に留めようとするかのように。

「ごめんなさい、春樹。・・・でもね、この仕事は表面上無事解決
したのよ、あなたのお陰で。だからもう忘れなさい。もう私たちの
手を放れたの」

「でも・・・あの男が許せない」

美沙が再び春樹に言葉を掛けようと口を開きかけた瞬間、ノックも
無しにいきなり事務所のドアが開いた。

そこには怒りと戸惑いをないまぜにしたような、穂積隆也の姿があ
った。

啞然として二人はその少年に目をやる。

「春樹がそいつを訴えたらいいんだ！ 春樹を殴った奴なんだろう？

顔を見たらんדר？ そんな時」

隆也の言葉に美沙は目を見開いて春樹を見た。

「・・・本当なの？ だって・・・春樹、そんなこと一言も言わな
かったじゃない！」

春樹は小さく首を横に振った。

その顔はさらに青ざめていた。

「違わないだろ？ 殴られて怪我して、そのあとすぐにその男を捜し始めたじゃないか。違うっていうんなら、誰にやられたんだよ。言ってみろよ！ 何隠してんだよ！」

一瞬、3人の誰もが沈黙した。

隆也は春樹の真意が分からず眉を潜め、そして美沙は隆也の言葉でようやく全てを把握し、春樹を見つめた。

「あなた、あの男に襲われて・・・その時なのね？」

「いつだっていいじゃないか！」

春樹が苦しそうに喘いだ。首筋に、決して暑くないというのに汗が伝い落ちていく。

その様子に隆也はハッとした。

「病院にも行ってないんだろ、お前」

「春樹、怪我してるの！？」

強い口調で立ち上がった美沙を避けるように体を反らした春樹はその一瞬鋭い痛みを感じ、体を折るように美沙のデスクの方に倒れかけた。

反射的に伸ばしてきた春樹の手を、美沙は掴んでやる事が出来なかった。

あからさまに避けた美沙の足元に倒れ込んだ春樹に、愕然として隆也が駆け寄った。

「何やってんだよ、あんた！」

隆也の視線が美沙に突き刺さる。けれど美沙は動けなかった。

「タクシー呼べよ。春樹、病院連れて行くから！」
隆也の声に美沙はハッと我に返ったように卓上の受話器に手を伸ばした。

「もういいから、隆也」

怒ったような声で言った春樹に、今度は隆也が驚いて振り返る。ゆっくり立ち上がりながら春樹は、二人を交互に見た。

青ざめた顔からは、今は戸惑いしか感じられない。

「ごめんなさい。自己管理ができてなかった。こんなのすぐに治ると思ってたから。・・・自分でタクシー拾って行って来るから、病院」

そして力なく笑った。

「いろいろごめんなさい、美沙。今日は・・・帰ります」

小さく頭を下げ、ほんの少し隆也に笑いかけたあと、春樹は部屋を静かに出て行ってしまった。

後を追える雰囲気でもなく、残されてしまった二人の間に、落ち着かない重い沈黙がただよった。

美沙が力なく椅子に座ると、隆也は美沙に歩み寄った。

「美沙さん」

「春樹が襲われたの、知ってたのね」

美沙は隆也に質問をさせる前に逆に話しかけた。

「ええ、知ってました」

「どうして教えてくれなかったの？」

「春樹が嫌がりました」

「馬鹿が！」

「馬鹿？ 馬鹿じゃないでしょう？ 春樹が一番怖いのは、そんな

怪我なんかして、美沙さんにここをやめさせられることなんですよ」美沙が沈痛な表情をゆっくりと隆也に向けると、隆也は尚も続けた。

「春樹はあなたをとて頼ってる。子供っぽいと思いますか？ 僕ははまだいろんな事が怖いんです。悔しいけど。それなのに春樹にはもう守ってくれる家族がない。あなたしかいないんです」

「・・・」

「今度は俺が質問してもいいですか？」

「・・・なに？」

「犯人に触って彼女が襲われるのを見た・・・って、どういうことですか？」

美沙はドクンと心臓が跳ねる音を聞いた後、ぐっと手を握りしめた。
やはり隆也は聞いていたのだ。

「聞き違いよ」

「じゃあ、もう一ついいですか？」

美沙はもう返事をしなかった。

「どうしてさっき、春樹を避けたんですか？ 春樹に触れられない
訳でもあるんですか？」

美沙は冷たく汗ばむ手を握り、意識が遠のくのを感じながら、ゆっくり目を閉じた。

その場に立っていることだけで、精一杯だった。

第18話 淵

「もしかして春樹、何か病気なんですか？」

「え？」

唐突な意外な隆也の言葉に、美沙は高い声を出した。

「その・・・触っちゃダメな病気とか。なんか、感染力の高いウイルスとか・・・」

「ウイルス？」

美沙が呆れたようにそう言うと、隆也は眉間に皺をよせた。

あまりにも的はずれな幼稚な予想に、美沙の緊張が一気に緩む。

「まさか。そんなことあるわけないでしょ？ 隆也はそんな風に思ってたの？ そんなことだったら私はいくらだってあの子を・・・」

そこまで言って美沙はハツとした。

取り返しの付かないミスに気付いたが、遅かった。

隆也が真剣な、咎めるような目つきで美沙をまっすぐ見つめている。

「そんなことだったら・・・何です？」

偶然なのだろうか。それとも、ハメられたのだろうか。

次第に美沙は、隆也が春樹を思いやる気持ちの強さに、気迫のようなものを感じ始めた。

同時にそれは美沙に対する嫌悪感なのかも知れないと思った。

どうしていいか分からなかった。

これほどまでに春樹を気遣う隆也に、隠す必要があるのだろうか。

何よりも、もう美沙は考えることに疲れ果てていた。

何が最善なのか、もう分からなかった。

「美沙さん」

隆也が問いつめる。

「春樹は・・・」

美沙は座ったままうつむき、喉の奥から絞り出すように小さく呟いた。

「春樹は大事な友達を一人、失うかもしれない」

それはもう拒否する言い訳ですらなく、言ってしまったも同然の言葉だった。

「それを聞いて俺が春樹を避けるようになるでも思ってるんですか？ バカバカしい。逆に聞きたいですよ。大事な友達を嫌いになる、どんな理由があるってんですか」

真っ直ぐな眼差しをこちらに向けてくる隆也に、美沙は温かい安心感を覚えた。

彼に話すことで開放されたい。誰かに理解されたい。

けれど、もしダメだったら？

もし隆也が春樹を避けるようになったら？

その両極の二つが美沙の中で対立した。

けれど隆也の性急な厳しい目は、ゆつくりと考える猶予を与えてはくれなかった。

「美沙さん！」

ごめんね、春樹。

美沙は、ゆつくりと口を開き、その言葉を口にした。

決して誰にも言わずに封印するはずだった、春樹の秘密。



春樹は1階エレベーターを降りてすぐの、薄暗いエントランスの壁に体を預け、ボンヤリ外を眺めていた。

タクシーを止めて病院へ行く。

その事に何の意味もないような気がして、もう15分、そこに佇んでいた。

隣のビルの1階は若い子に人気のファーストフード店になっている。学校帰りの女子高生達がそこへ向かうため、制服の短いスカートをフワリと揺らしながら、楽しげに春樹の前を横切つてゆく。

男子高校生が3人かたまり、肩を組んでふざけあいながら通り過ぎてゆく。

退屈すぎるほど平穏で当たり前だった世界が、自分とはプツリと切り離されて、今では別の世界のように感じる。

切り離されたこちら側。

このエントランスのように、薄暗く無機質で何もない世界に居るのは、この世で自分だけのような気がした。

美沙は？

春樹の胸がドキリとした。

兄の元恋人。春樹を弟のように思い、世話をやいてくれる美沙。

けれど、美沙にとって春樹がどんどん重荷になっていることを、春樹自身イヤになるほど感じていた。

昨日あんな風に自分の辛さを美沙に訴えたことを、春樹はとても後悔していた。

どうして自分の胸にだけ収めておけなかったのだろう。

自分で判断してやったことではないか。

あんな事を言っても美沙が苦しむだけだ。

そして、勝手な調査をして、危ない目に会ったことも、知られてしまった。

春樹は大きく息を付いた。

そして自分に問いかけてみた。

仕事を辞めさせられ、そして「サヨナラ」と美沙が言ったら、その時僕は、どうすればいいだろう、と。

第19話 君に伝えたいこと

この少年は、まず何と言うだろうか。

美沙は全てを聞き終わった隆也の、うつすら皺の寄った眉間のあたりをボンヤリ見つめていた。

信じないだろうか。

くだらない冗談だと怒るだろうか。

隆也は何も言わず、ゆっくり目線を部屋のあちこちに移し、必至に何かを考えているようだった。

ひとつひとつ記憶をたどり、入念に検証でもするように。

そしてようやく美沙に視線を合わせると、口を開いた。

「それは本当のことなんですか？」

「こんな冗談言っても、仕方ないでしょ？」

「・・・そうですね。嘘だったら、幼稚すぎる。ここでそんな作り話をする意味も無い」

隆也は納得したのかどうか分からない、低く落ち着いた声で言った。

「でもね、隆也・・・さっきも言ったように、春樹は私以外には誰にも教えなかった。両親にも、兄にも。臆病なほど慎重に守ってきた秘密なのよ。もしも信じてくれたのなら、春樹の気持ちだけは・・・」

「あなたは！！」

突然美沙の言葉を遮り、隆也が声を張り上げた。

ビクリとして息を呑んだ美沙に、隆也の視線が鋭く突き刺さった。

「美沙さんは、・・・だからあんな態度を取ってたんですね、春樹に。だから指一本触ろうとしなかったんだ」

「・・・」

「あなたはレディホークなんかじゃない」

そう言う隆也はクルリと踵を返し、乱暴にドアを開けると出て行ってしまった。

“誤解された”

とっさにそう感じ、慌てて後を追って廊下に出たが、隆也はすでにエレベーターに乗り込み、扉を閉めたところだった。呼び止めてどうしようと思ったのか。

「誤解だ。自分が春樹に触れないのは、決して知られてはいけない秘密を持っているからだ」とでも言いたかったのか？

そんな事を隆也に言えば、どうなるか考えるまでもない。

今度は隆也が春樹に触れるのを阻止しなければならない。

なんてバカバカしい茶番だろう。

何て滑稽なんだ。

美沙は知らず知らず、自分でも説明のつかない嗤いを口元に浮かべていた。

頭が考えることに疲れ果ててしまった時の信号だ。

「どうにもなりはしない。良くも、悪くも。・・・ねえ、そうでしょ？ 春樹」

降下していく表示ランプを見ながら美沙は、心臓のあたりがゆっくり氷のように冷えて行くのに、ただ耐えるしかなかった。



常識的にはあまりに非現実的で、信じがたい事ではあったが、それはすんなり隆也の腑に落ちた。

つじつまの合わなかった出来事や春樹の言動が、それですべて理解

できた。

あの時も。そしてあの時も。

狭いエレベーターの中で、高校時代のやり取りが次々と思い出される。

どんな時でも春樹は女の子に触れなかった。それはハタ目に怯える風に見えるほどだった。

美沙の言ったことが本当なら全て納得できる。

相手の見たものや、記憶、感情が流れ込んで来るというのは、いったいどういう感じだろうと隆也は想像してみた。

例えば女の子だしよう。

朝起きて着替え、トイレに行き、友達としゃべり、恋人との時間を過ごし、あるいは体を交え、風呂に入り、一人プライベートな時間を過ごす。そんな女の子の日常まで覗き見てしまう。

決して表面に出さない歪んだ感情や、人に聞かせたくない身体的、あるいは性的な悩みだって人はそれぞれ抱えている。

心や記憶は隠しているからこそ人間として普通につき合える。

境目なくそれが流れ込んで来ると言うことがどんなに苦痛か、想像しただけで胸が悪くなってくる。

もし恋をして、好き同志になったとして、その女と肌を合わせることが出来るだろうか。

自分がそんな能力を持っていると言うことを隠しながら、平静で居られるだろうか。

ましてや知られてしまったら。

想像するだけで精神がどこか病んでしまう。

自分ならそんなこと、耐えられない。

震えが来るほど恐ろしいことだった。

隆也はふと、春樹と初めてちゃんと話をした日のことを思い出した。あの日春樹は、万引きと間違われた隆也の悔しい、やり場のない怒

りを全て理解していたのだ。
嘘までついて隆也を引き留め、ずっと側にいてくれたのだ。

1階でエレベーターを降りエントランスへ向かうと、壁に寄りかかり、外をぼんやり見つめている春樹の後ろ姿があった。

隆也は一つ深呼吸してから、春樹の名を呼んだ。

目頭が熱くなるのが鬱陶しくて、少し強い口調になってしまったが、仕方がなかった。

春樹がふと振り返り、キョトンとした表情で隆也を見る。

よほど隆也の顔つきが変だったのだろう。

「隆也、どうした？」と、不思議そうに訊いてきた。

隆也は無言で春樹の右手をつかんだ。

最初とつさに手を引っ込めようとした春樹は、次にビクリと体を強ばらせ、目を見開いて隆也を見つめた。

少々強引だとは自分でも分かっていたが、白黒つけないと踏み出すことなどできない。

“ごめん、春樹、これが俺なんだ。”

信じられないと言った表情で、そのまま春樹はじっとこちらを見つめている。

隆也は確信した。

美沙の言ったことは本当だったと言うことを。

しばらく二人はそのままじっとしていた。

もし外の歩道を通る人が覗き込んだら奇妙に思ったかも知れないが、隆也はまるで気にならなかった。

確かに通じていると感じた。何の力も無い自分でもそう感じられる。

言葉で言い表せない熱。

触れた肌で何かが弾け、春樹の微かな震えが伝わってくる。

今、この瞬間、隆也の想いが確実に春樹に流れ込んでいるのだ。

《俺、いっしょに病院、ついていくよ。いいだろう？》

心の中だけでそう呼びかけると、春樹は涙で潤んだ琥珀色の目で真っすぐ隆也を見つめ、コクンと小さく頷いた。

最終話 解けない呪縛

「谷川理紗の両親が、あの間宮って男を訴えたんだってな！」
午後8時。立花薫がよく通る声を張り上げて事務所に飛び込んだ。
た。

美沙がその事を本社に報告したため、局長の立花聡に聞いたのだら
う。

「ノックくらいして下さい。そして声が大きい。このドア、防音仕
様じゃないんだから」

美沙が書類から目を上げずに、静かに言った。

隆也が飛び出して行って少しした頃、谷川理紗の母親から美沙に電
話があった。

娘から全て聞き、じっくり話し合った結果、被害に遭ったことを警
察に届け出る事にしたのだと。

そして、美沙からの手紙に勇気づけられた事を伝えて欲しいという
娘の伝言を、母親は付け足した。

手放して喜べる事ではなかったが、美沙は取りあえずホッとし、心
配しているだろう春樹にその事をメールした。

きつと春樹はまだ病院に違いなかった。

もう隆也に会っただろうか。

隆也は“あの事”を確かめただろうか。

隆也に告げたことを、春樹はどう思うだろうか。

そんなことを考えると、美沙は春樹に直接電話をかける勇気が出な
かった。

「ねえ美沙ちゃん。君たちが“危険性があるから迅速に”って言っ

てたのは本当だったね。俺たち本社組が夜を徹したのは無駄じゃ無かったって訳だ。ねえ、何かそんな情報網があったの？」

美沙はスツと頭を上げ、「カンよ」と、素っ気なく薫に言った。

「あれ？ 何か怒ってる？ 姫」

「私は姫でもハニーでもないわよ、立花さん」

「怒った声も魅力的だけど、やっぱりそこは“薫さん”って呼んでほしいな」

薫は右手を腰に当てて立ち、左手で髪をかき上げながら言った。

その立ち姿はどうにも鼻につくほどキザだが、同じくらいにユーモラスだ。

美沙は思わずクスリと笑ってしまった。

「そんなことより、いいの？ こんな所で油売ってて。立花局長にまた怒られるわよ？」

「ちょっと息抜きも必要なんだよ。この後びっちり浮気調査でスケジュール埋まってるからね。節操のないオヤジの尻追いかけるのもいい加減ウンザリさ。美沙とここで昨日みたいに行方調査できたら幸せなの。・・・あ！ ねえ、俺を雇わない？」

「うちには春樹だけで充分よ」

少し笑いを含んだ声で美沙が言った。

「そう言われると思った。あの子にはなんだか、いろんな意味で敵わない気がするよ」

薫もニヤリと笑うと、部屋をぐるりと見渡した。

「ところで春樹君は？ もう帰っちゃった？ なんか具合悪そうだったけど」

美沙がほんの少し沈黙をつくった。

労災でもあるし春樹の怪我の報告は本社に届けておかねければならない。

けれどその説明をすることはとても微妙な問題を含み、美沙を滅入らせた。

あの暴行が間宮の犯行だという事は分かっているが、それは春樹にだけしか分からない真実であり、根掘り葉掘り訊かれるのを嫌う春樹は、被害届も出さないだろう。そのことをきくと本社は疑問に思うだろうし、歯切れの悪い嘘をつくだろう春樹を見るのは、美沙には辛かった。

沈黙の嫌いな薫がまた何か口を開こうとしたその時、事務所のドアがカチャリと開き、美沙の心臓がドクンと跳ねた。

「遅くなってごめんなさい、美沙。病院行ってきました」

そこには、夕刻出ていった時とは別人のように元気そうに微笑む春樹が立っていた。

手には、数日前隆也が持っていた水色の紙袋を持って。

「あ・・・お帰り。どうだった？」

恐る恐る美沙が訊く。

「大丈夫。肋骨に3本ひびが入ってただけだった」

「肋骨にひび？　なんでまた！」

美沙よりも早く薫が大声を出した。

「大丈夫じゃないだろ。どうした？　事故か？」

けれど春樹は薫に一瞬ニコリと笑いかけただけで、再び美沙に向き直った。

「ちゃんと固定してもらったし痛み止めももらったから、明日から普通に動けると思う。心配かけてごめんなさい」

そう言って、神妙な顔でほんの少し頭を下げた。

「辛かったらいつでも言いなさいね。優秀な助手がいないのは痛いけど、めいっぱい有給あげるから」

動揺が伝わらないように気を張って言った美沙の言葉に、春樹は柔

らしく笑い返した。

救われるような穏やかな笑顔だ。

体が楽になったからだろうか。谷川理紗の事を知ったからだろうか。それとも……。

美沙の心を読みとったかのように春樹は手に持った水色の紙袋をひよいと掲げて、美沙に見せた。

「隆也に付き添ってもらったんだ。病院」

美沙は動揺を隠し、黙ったまま春樹をみつめた。

「帰る時にさ、たくさんDVD貸してくれたんだ。ずっと僕に渡そうと思って持ち歩いてたらしいんだけど」

「へー。いい友だちだね、隆也くんって。どの子？ この前ここに來てた、若いツバメ？」

密かに疎外感を感じていたらしい薫が、いきなり近づき会話に入ってきた。

「何ですか、若いツバメって」

春樹が笑った。

「知ってるんじゃない。笑ってる癖に」

「知らないですよ、立花さんが言うといやらしく聞こえて……イタタ……やめてくださいよ、笑うと痛むんだから」

「笑え……。もっと笑え……」

子供のように嘸し立て、春樹が横腹を抱え込むのをニヤニヤして見つめながら、薫はその水色の紙袋の中を覗き込んだ。

「へー。たくさんあるね、DVD。どんなジャンル？」

春樹が紙袋を差し出すと、薫が中身を物色し始めた。

「ほとんどホラーとかSFだな。もっと甘い無いの？ セクシーなのがいいな」

「僕が借りたんですってば」

「あ！これは懐かしい。これはいいよ。スペクトル・ラブ・アドベンチャーだ」

よく分からないジャンルを口にしながら薫が取りだしたDVDは、がっちりした黒騎士の肩に一羽の鷹が留まっている美しいパッケージだった。

美沙が驚いたようにDVDを、そして春樹を見た。

春樹はそれを美沙に手渡した。

「『レディホーク』。これ、最初に見ろって、わざわざレンタルして隆也が入れてくれたんだ」

春樹が優しい表情で美沙に言った。

「この鷹は美沙だからって」

呼吸が苦しくなってくるのを感じながら、美沙は春樹をじっと見つめた。

琥珀色の瞳を覗き込んで、その心を全部読みとりたかった。

「鷹は人間として男に触れられないけど、いつだって側にいてさ。呪いが解けることを信じて、一緒に戦うんだって。隆也がそう言ってた」

春樹はそこで一度言葉を切り、うつむき、そして再び顔を上げて美沙を見た。

「隆也はやっぱり滅茶苦茶いい奴だった。心配しなくて良かったんだよね、美沙。なんだかさ、少し気持ちが悪くなったんだ」

「・・・怒ってない？」

やっこの思いで美沙がそう言うと、春樹は笑った。

「ビックリしたけど・・・不思議で、安心できるような、妙な気持ちだった。きっと美沙が一つ、呪いを解いたんだ」

口を開くと堰き止めていた感情が溢れだしそうで、美沙はただ黙ってそのDVDのパッケージを握りしめた。

突然生まれた熱にほだされて、無様に震えてしまうのを堪えようと、身体に力を入れてみる。

春樹も自分の言ったセリフに照れるように口を閉ざした。

ただここに、不自然な沈黙にそわそわと耐えきれない様子の男がひとり。

「何だろうな〜・・・何があったか良くわかんないんだけど・・・。まあ、あれだ、春樹君。体もしんどい事だし、今日はもう帰って、大人しく俺と一緒にDVD観よう」

「何で立花さんとDVD観なきゃいけないんですか」

「いいじゃないか。一人より二人の方が楽しいだろ？ 君とは積もる話もあるし」

「僕は話なんてありませんよ。僕は一人でその結末を観たいんです」
「結末？」

薫が春樹を見たので、春樹は小さく頷いた。

「呪いが解ける瞬間を」

ああ、映画のね、と薫は笑った。

「ハッピーエンドと分かっているでも観たくなるんだよね。あのラストは感動的だったよ。美しくて官能的ですらあった。あれ？ キスするんだっけ。抱き合うんだっけ」

「知りませんよ、観てないのに！」

春樹が少し顔を赤らめて薫に突っかかるのを、美沙はボンヤリと見ていた。

“ハッピーエンドなんて、あるのだろうか。この現実の世界に”

春樹の笑顔が、ほんの少し無理しているように感じられ、そして、そう勘ぐってしまう自分自身に美沙は嫌気がさした。

『大丈夫だよ、美沙。心配しないで』

春樹は必死にそう伝えようとしている。

その気持ちを受け取ってやればいいじゃないか。

その笑顔を信じなさいよ。

どっちにしろ、人生にはハッピーエンドもバッドエンドも無いのだから。

与えられた運命の中で藻掻き、そして幸せだと思えることを模索していくしかない。

そうだよね、それでいいよね、春樹。

美沙は楽しそうに薫と笑い合っている春樹を見つめ、ほんの少し微笑んだ。

“だけど、お前たちの呪いは 解けないよ”

どこかから絶えず嘲笑うように囁きかけてくるその声を、心の中から必死に追い払いながら。

(END)

最終話 解けない呪縛（後書き）

『KEEP OUT 3 君に伝えたいこと』を読んでもくださった皆様。

本当に、本当にありがとうございました。

お察しのよう、このシリーズはまだ終わりません。

続編はぜひぶん先の投稿となる予定です、

もしよろしかったら、どうぞ彼らのことを今しばらく、記憶の隅に留めておいてやって下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9726r/>

KEEP OUT 3 君に伝えたいこと

2011年5月22日00時36分発行